巻頭インタヴュー

社会と向き合い続けて

キャスター
国谷裕子
Hiroko Kuniya

聞き手
ヴァン編集部

第一線で活躍し続けるキャスター、国谷裕子さん。23年間にわたりNHKの報道番組「クローズアップ現代」のキャスターとして、向き合うべき現代のテーマを私たちに語り届け続けてくれたことは記憶に新しく、そのたたずまいも含め、発せられる数々の言葉は私たちの心に深く響きます。7月、東京都内で取材が実現しました。

報道の世界に入るまで

Vent(以下、V)： 国谷さんは報道の世界に入る前、外資系の会社に勤められていたそうですね。

国谷裕子： 私は小学校から大学までのかなりの期間を海外で過ごし、日本にいた時期もインターナショナル・スクールに通っていました。日本の教育を受けていないことにコンプレックスをもち、アメリカの大学を出た後は日本で働こうと思ったからです。

V： コンプレックスを感じたのは、どのようなときですか？

国谷： 大学時代、専攻していた国際関係学の授業でのことです。私はクラス唯一の日本人でしたので、アメリカの核戦略や軍縮、核抑止力などの話題が出たときは、被爆国の代表者として話をすることになります。被爆国側の立場として、説得力のある発言をしたいのに、思うようにできませんでした。それは日本の歴史をきちんと学んでこなかったために、知らないことが多いからだと気が付いたんです。アメリカでは、議論で自分の国やアイデンティティを背負って発言できないと、その場にいないことになってしまう。このままではいけないとずっと思っていました。

V： だから日本に戻られたのですね。

国谷： はい。でも当時、帰国子女に対する就職の門戸は開かれておらず、企業の帰国子女の採用枠もありませんでした。それで唯一面接していただけた生活用品系の会社で働くことになりました。新人でしたが責任あるポジションを与えられ、商品開発やコマーシャルづくりに携わりました。しかし、私は担当していた「化粧せっけんを一つでも多く売る」ということに対してやりがいを感じることができずに、10か月ほどで退職してしまったんです。そしてためたお金で、バックパックを背負って海外一人旅に出かけたのです。会社では大きな経験を積ませていただきましたし、あのとき続けていればマーケティングの先端的なキャリアを積んで、いろいろなチャンスもあったと思います。その頃は若かったので分からなかったんですね、自分に与えられた大きなチャンスがどういう意味をもつのかということを。

本を貸してくれた友人

V： どのような学校生活を送っていましたか？

国谷： 小学校はアメリカ、大阪、東京、香港で経験しました。英語が話せない状態で海外に行っても、からかわれたり、いじめられたりすることはありません。日本に戻ってきたときには、日本語が話せないことでからかわれたことがありました。休み時間に追いかけ回されてトイレに隠れたこともありました。体育のドッジボールで、私をからかった子たちにどんどんボールを当てているうちに、認めてもらえて仲よくなりましたけれど(笑)。学校の先生は私のことを尊重してくださって、英語の授業で私に英単語の発音の模範をさせるなど、周囲になじむ機会を与えてくださいました。それはありがたかったです。

V： 日本の文化や文芸に深く関わる機会はありましたか？

国谷： 高校生の頃に、他の日本の高校に通っている読書好きの友人たちに出会うことができました。私が皆にどのような本を読んでいるのかと聞いたところ、その中の一人が袋いっぱいにたくさんの本を持ってきてくれたので、それらをとにかく読みました。「読書交換日記」もしましたし、この友人たちに出会えてほんとうによかったと思っています。

V： アメリカではどう過ごされていましたか？

国谷： 在学していたブラウン大学がボストンに近かったので、学生時代に小澤征爾さんが音楽監督を務め指揮されていた頃のタングルウッド音楽祭を聴いたことが印象に残っています。週末に長めの休みがある時は、ニューヨーク出身のルームメイトと一緒に、ジャズを聴くためにブルーノート、スイート・ベイジルやヴィレッジ・ヴァンガード、クラシック音楽ではメトロポロタン歌劇場、カーネギーホールなど、ニューヨークのさまざまな場所に行きました。音楽も美術も大好きでしたから。会社を辞めたあとの旅では、旅先の美術館は必ず訪れましたね。

専門家から学んだ４年間

V： 報道番組に関わるチャンスがあり、その世界に足を踏み入れました。たいへんお忙しい中、番組で取り扱うさまざまな対象について、どのように勉強されましたか？

国谷： ゆっくり勉強できる時間はありませんでした。ふだんから新聞や雑誌の記事にはできるだけ目を通しますし、年鑑などで各国の基礎知識も頭に入れながら、放送に臨んでいました。衛星放送の仕事を始めた頃、中ソ首脳会談のために中国に渡ったところ、いきなり天安門事件が起こり、その場で情報収集し続けたことも。冷戦が崩壊していく過程では、インターネットのない時代でしたので、海外メディアが伝えてくる記事を必死に読んでいきました。そうした中でいちばん勉強になったのは、毎日スタジオにお越しいただくゲストの方々のお話でした。歴史の研究家や国際政治の専門家、国際関係に詳しい方など、その分野でトップの方がたくさんスタジオに来られました。

V： 事前に打ち合わせはできるのですか？

国谷： 打ち合わせる時間がなかったので、本番はゲストの方々に分からないことを質問する形をとりました。衛星放送はまだ始まったばかりで、視聴者も少なく、荒削りでも許されたのだと思います。衛星放送での４年間は歴史を塗り替えるようなことが次々と起こった時期で、駆け出しのキャスターだった私には一日一日がとても充実した勉強の機会になりました。

「何かおかしい」と思ったら、問うことを躊躇してはならない。出かけて話を聞いて、知って尋ねて、行動を起こす。それが、自分の感度を研ぎ澄ますことになるのです。

日本の変化を見続けて

V：その後「クローズアップ現代」のキャスターを務められたのですね。

国谷：「クローズアップ現代」は衛星放送の頃よりも、自分の全く知らない分野を非常に多く扱う番組でした。この番組では担当ディレクターが私より数週間早く取材を始め、放送の日が近くなると資料の束を下さいます。それを読み込み、十分でないと感じたら関連する本を自分で探したり、違う観点からの情報を入手したりして、情報をずっと追いかけていましたね。何かの専門家になることはできませんでしたが、俯瞰する立場でいられたと思っています。

V：番組の放送が開始された1993年からの23年間を思い返すと、世界が大きく変わった時代だったと思います。

国谷：23年間のうちの前半は、それまであたりまえだったことが、そうでなくなった時代でした。1980年代、海外から来日した記者の方々のリサーチャーや通訳をしていると「なぜ日本は競争力があるのか？ 生産性が高いのか？」と頻繁に質問されました。日本の生産構造はメーカーと下請けが固く結ばれていること、企業は終身雇用で従業員と家族のような関係を保っていること、人々が勤勉であること、それらが生産性につながっていることを説明しましたが、「クローズアップ現代」が始まった頃バブルが崩壊し、それらがマイナスの要素のように語られるようになりました。人を簡単にリストラする時代になってしまったのです。これまでのあたりまえのことが壊れていくと感じながら、日々暗い気持ちで伝えていました。

V：番組では毎日約30分間、1つのテーマを取り上げていくわけですが、記憶に残っている出来事はありますか？

国谷：番組開始の1993年は、55年体制が崩れて連立政権時代に突入した年でした。自民党を飛び出した羽田孜（はたつとむ）さんに、突然生放送でインタヴューすることになったのです。それまで私は政治家にインタヴューする経験がなかったので、自分が試される機会だと思いました。

V：そのインタヴューでは、どのような印象を受けましたか？

国谷：日頃から政治家を取材している記者の方でも、質問できないことや言えないことがあるようでした。私はアメリカのジャーナリズムを見て育ったので、なぜ日本では記者の方が会見などの場でもっと質問をしないのかと不思議に思っていました。日本の政治とメディアの関係を何も知らない私だからこそ、できる質問も多くあったのかもしれませんね。

言葉の存在

V：国谷さんは、言葉がいかに重要であるか、さまざまな場でおっしゃっています。

国谷：メディアは映像の力と言葉の力をもっています。テレビではどうしても映像の力が強いので、映像により人々は物事の判断をしがちです。でも実は、映像に映し出されたものが全てではなく、むしろ映像が物事の豊かさを削ぎ落としてしまっていることがある。カメラが入れず映像にできないものは常にあって、むしろその部分こそ重要であることも少なくありません。映像が人々に与えるであろう印象を意識しながら、映像では見えない部分を言葉で伝えていかなくてはなりません。

V：本当に重要なことを、言葉が伝えてくれるのですね。

○ くにや・ひろこ
大阪府生まれ。高校時代までアメリカ、香港、日本で生活。79年、米のブラウン大学卒業。81年、NHK「7時のニュース」英語放送の翻訳・アナウンスを担当。88年、NHKの「ニュース・トゥディー」国際担当キャスター。89年、NHK衛星放送「ワールドニュース」キャスター。93年から2016年3月までの23年間、NHK総合テレビの「クローズアップ現代」のキャスターを担当。この間、特別番組や「NHKスペシャル」等、報道番組のキャスターも務める。
東京芸術大学 理事
FAO(国連・食糧農業機関)親善大使(日本担当)
1998年放送ウーマン賞、02年菊池寛賞、11年日本記者クラブ賞、16年ギャラクシー賞特別賞受賞
著書『キャスターという仕事』(岩波新書)

国谷: でも、言葉は独り歩きをすることもあります。メディアで頻繁に使われた結果、決まったイメージが付いてしまうことはよくあります。使われていくほど悪いことのように思われてしまう「ねじれ国会」などがその例です。

V: 私たちも言葉が持っている本来の意味を意識しなくてはいけないですね。

国谷: これまでに起きたことのない事象に言葉を与えることで、皆が理解できることもあります。例えば「犯罪被害者」です。私はこの言葉が登場するまで、犯罪を受けた被害者の方々が裁判で質問する機会がなかったことも、犯人が起訴されたかどうかの情報も伝わらなかったことも知りませんでした。「セクシャルハラスメント」もそうですが、名付けられてメディアが扱うことで問題が社会化し、人々の共通認識となるのです。

俯瞰すること

V: 2020年からは、これまでの紙の教科書とともに、デジタル教科書も教育現場に一層普及していくことになります。

国谷: 映像によって提示された図や音は分かりやすいので、教育現場では子どもたち、テレビなら視聴者の興味を引くでしょうね。ですが「分かりやすい」ことで、人は分かったつもりになってしまうことがあります。そうすると興味を失ってしまう。分かりにくいものは、分かりにくいままにしておいたほうがよいこともあります。

V: デジタル化で情報が豊かになればなるほど、言葉で伝えることの重要性と責任を考えなければならないですね。

国谷: 新聞はデジタル化され、携帯やタブレットでも読むことができますが、それだと興味のある記事だけを読むことになりますね。一方、紙の場合は紙面が大きいので一覧性があり、興味のない情報も目に入ってきて、自然と俯瞰した情報を得ることになります。俯瞰することこそ大切なのです。

「問う力」の大切さ

V: 私たちは今後、あふれている情報とどう向き合っていけばよいのでしょうか?

国谷: 2016年を代表する言葉としてオックスフォード辞典が「post-truth(ポスト真実)」を選びましたが、それは事実より感情的に共感できるものを人々が信じるようになったことを反映しています。危険なのは、自分の知っている情報だけが正しいと思い込んでしまうことです。いろいろな情報にアクセスしているつもりでも、実際は友達からSNSで回ってきたものであり、同じ傾向の仲間内だけでおもしろいと思っているにすぎないこともあります。それだと別のグループとは分断されている可能性が高いんです。

V: 最近では「フェイクニュース」など、嘘の情報が流れることもあります。

国谷:「フェイクニュース」をマケドニアの少年たちがつくっていたことが話題になりましたね。「ローマ法王がトランプ大統領を支持している」という嘘のニュースが広がって、それをいまだに信じている人もいます。真実と嘘を混ぜてニュースを発信し、少年たちが収入を得る。そんなこともできてしまう時代になりました。これからは学校でリテラシー教育*も必要だと思います。

V: 既存の偏見をそのまま受け入れることは、より深く考えることよりも楽だからといって、そちらに流れてしまってはいけませんね。

国谷:「何かおかしい」「不思議だ」と思ったら、問うことを躊躇してはなりません。自分で出かけて話を聞いて、知って、尋ねて、行動を起こす。そのことによって自分の感度が研ぎ澄まされるので、嘘の情報が出てきたとき、疑問をもつことができるかもしれません。今後情報更新のスピードがますます速くなり、人々が嘘偽りを信じてしまうようになれば、「スローニュース」(時間をかけて調査、分析し、深掘りしたニュース)がより必要になるのではないでしょうか。

＊リテラシー:読み書きの能力。転じて、ある分野に関する知識・能力。

「本物」に触れる

V：人々が感度を研ぎ澄ますために、教育に期待することはありますか？

国谷：美術や音楽など「本物の芸術」に触れることですね。「これからは“AI時代”だから、人工知能が人の仕事を奪うのではないか」と言われますが、このような時代だからこそ感性を磨くことが大切です。幼い頃から自分の住む場所の風景や自然を感じて、近くに美術館があれば足を運んで。お年寄りの話を聞いて、お祭りがあったらお神楽やお囃子の音を聴く。このようなことが自分の大きな柱やアイデンティティとなり、確固たる自信につながっていくんです。「よいものはよい」という感性を磨く教育が、これからはどんどん必要になってくると思います。

V：国谷さんは昨年から東京藝術大学の理事に就任されましたね。

国谷：まだ藝大の全体像は分かっておらず、見学してみて「こんなことをしているのか」と驚く授業も多くあります。藝大出身のすばらしい感性をもっている学生や卒業生が、社会ともっともっと接点をもって活躍できる環境をつくることのお手伝いができればと思っています。

子どもたちの未来のために

V：現在はどのようなことに興味をもっていますか？

国谷：２つありまして、１つはジェンダーに関する問題です。日本では人口減少で悩んでいる地域が多く存在します。原因の１つとして、若い女性たちが、自分たちの地域では活躍する場所がないとして、都市の大学へ進学したまま帰ってこないのです。女性たちが帰らないと、その地域の人口減少は進みます。日本全体での女性の活躍とそれに対する正当な評価が飛躍的に拡がらなければなりません。

V：もう１つの関心とは？

国谷：「SDGs(Sustainable Development Goals ／持続可能な開発目標)」の認知を広げる活動をしています。「SDGs」とは国際連合が2015年に採択した目標で、2030年までに貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社会等に関する問題に対して、経済・社会・環境などを統合して解決策を見いだしていこうとするものです。最近人間が地球をつくり変える力をもってしまったことから、地球のメカニズムが崩れてきています。これまでの「大量生産」「大量廃棄」による「大量の資源消費」をなくさなければなりません。そうでなければ地球は維持できません。さまざまな方々に話をしていますし、若い方々たちにも積極的にお話ししたいと思っています。最近世界は変わり始めました。ガソリン車の販売を将来中止すると決定する国が増えており、イギリスも2040年からガソリン車とディーゼル車の販売を禁止すると発表しました。

国谷さんが活動している「SDGs」のバッジ。定められた17の目標「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」「すべての人に健康と福祉を」「質の高い教育をみんなに」等には、それぞれテーマとなる色があり、バッジはその17色でつくられている

V：近年は温暖化が進んでいます。

国谷：地球の温度が１度上がると、大気中の水蒸気が７％増えます。その７％が大雨となり、集中して降ってしまうと大災害を引き起こします。その一方で全く降らない地域が出てくることも。また、秋と冬に海水温が20度を下回らないと昆布やワカメが育ちません。問題になっているのがこの「磯枯れ」で、海の中の二酸化炭素を吸収してくれる海中林や生物がいなくなると、海が枯れてきます。温暖化のスピードは、過去に専門家が予測したよりも早まっていて、生態系の連鎖の悪循環が始まっています。このままパリ協定が実施されなければ、今世紀末前までに東南アジアの温度は６度、最悪の場合８度上昇し、米の収穫量は半分以下になるとの報告書も最近でました。温暖化でいちばんの危機に陥るのは食料や水です。2030年に解決するよう目指していますが、この頃はちょうど今の子どもたちが大人になる時期です。これから子どもたちが生きていく世界と、子どもたちの将来のために、国を超えてあらゆる人々が連携していかなければなりません。

Information

国谷裕子
キャスターという仕事
岩波新書
定価（本体840円＋消費税）
2017年

ジャーナリズムに新風を吹き込んだ「クローズアップ現代」。真摯に果敢に自分の言葉で問いかけ続けたキャスター、国谷裕子さんが23年にわたる挑戦の日々を語る。

授業者に訊く――1

楽譜で自分のパートを指でなぞる学習

指導力で引き出す意欲的な歌唱

授業者：津田 尚（札幌市立琴似中学校）　**聞き手：小松康裕**（全日本音楽教育研究会 事務局長）

今回の「授業者に訊く」は、1・2ともに中学1年生の合唱です。まずご紹介するのは札幌市立琴似中学校。合唱曲『Let's Search For Tomorrow』を教材とする津田尚先生の授業を訪ね、生徒たちの意欲を引き出す指導法や環境づくりのポイントを伺いました。聞き手は全日本音楽教育研究会の事務局長を務める小松康裕先生です。

○こまつ・やすひろ
全日本音楽教育研究会 事務局長
武蔵野音楽大学音楽学部 非常勤講師

音取りは楽譜を見ながら

小松：私が教師をしていた頃から、音楽室に机を置かない学校も多くみられるようになりましたが、こちらの学校では机があり、後方に合唱台があります。私も机は置いていましたし、歌うときは机を後ろに下げていました。譜面を読む活動と、歌う活動の集中は切り離す必要があると思うからです。今日見せていただいた授業では、机の上で楽譜を指でなぞって視唱する学習と、合唱台で歌う学習をされていて、それぞれ集中していたと思います。

津田：座っていても歌えるし、楽器の演奏もできますから、私にとってはこれが普通です。合唱コンクールの直前になると、机を置かず合唱台だけにすることもありますが、鑑賞の授業の場合、机は必須ですね。

小松：楽譜を見て歌うことは、先生のこだわりですか？

津田：私は歌を専門に勉強してきました。自分で譜読みをするときは、まず楽譜を見てピアノやキーボードで音を取りながら、メロディーを確認します。その場合、大きな声ではなくつぶやくように歌っていました。子どもにもその段階を踏ませたほうが、よりスムーズに音が脳に入るんじゃないかと思って試したところ、やはりそのほうが、音取りが早いということに気付きました。

小松：自分のパートをつぶやきながら楽譜を指でなぞる学習の中で「自分の中に、自分のパートの音をしっかり置いてね」という津田先生の言葉がありました。あれはすばらしいですね。

津田：いつも「自分のパートの音をいちばん大きく心で鳴らして」と伝えています。そうすると他のパートが聴こえてきても、自分の音は迷子になりません。また、早い段階から他のパートと一緒に歌ったほうがよいですね。パート練習は、授業中に1回、アルトと男声を10分程度行うだけにとどめています。主旋律のソプラノに合わせるように、ソプラノと男声、ソプラノとアルトを歌わせていきます。そして例えば、ソプラノと男声が歌っているときには、アルトは両方の声を聴きながら心の中で歌うようにします。そのような訓練をすると、早い段階でハーモニーが出来上がります。これらを1年生から始めれば、3年生になったとき、かなり難しい音も、すっと音取り出来るようになります。

教師が教えるべきこと

小松：『Let's Search For Tomorrow』の中で、創意工夫させるポイントの箇所はどこですか？

津田：「今 旅立とう 後ろ振り向かず」という部分ですね。ここは「Let's search for Tomorrow」という歌詞に挟まれた中間部分に出てきます。しかも、この箇所に入る前、4分の2拍子に変化する伴奏が“ここから変わるよ”と提示している。ここが曲の中でいちばん何かを感じる箇所で、工夫

がより深まっていくところではないかと思いますね。

小松：「探しに行こう」という歌詞の音は、「何かを見つけたと想像して、指をさして歌おう」と指導されていました。グループでこうした歌い方を話し合う授業展開をよく見ますが、この発想は子どもたちだけでは出てきません。教師が教えるべきことだと、あらためて思いました。最近は若い先生の間に「教えてはいけない・考えさせなければいけない」という風潮がありますが、教えるべきことは必ずあると思います。

津田：教えることと、考えさせることは、分けなくてはなりません。それに、1年生・2年生・3年生で授業の進め方が変化してきます。国語的な表現力や、周囲とコミュニケーションをとってつくり上げる力が十分でない1年生の場合、させることを限定しています。3年生までにそれらの力が大きく育ち、子どもたちから私を超える発想が出てきた頃に、考えさせる学習をします。

小松：授業の中で、子どもの心が動いた瞬間が何度もありました。その中の1つが、この「探しに行こう」の指導だったと思います。ここでは子どもたちの心が動いて、声が変わりました。指さしながら歌ったとき、子どもたちは「自分が思っていることを先生が言ってくれた」と感じたでしょう。自分の歌が変わったという実感がないと、成長できないですよね。このような瞬間が何度かあったので、子どもたちは学んでいて楽しいと思います。

津田：こちらが発想として与えてみて、子どもが「なるほど」と思えば、それは子どもの発想に変わっていきます。自分がやってみせて「どう聴こえる？」と投げかけたときに、「こう聴こえる」と返ってくれば、それはもはや教師の発想ではなく、子どものものです。いかに彼らの発想を豊かにする発問を投げかけるかということを意識しています。

導入の「指揮遊び」。紙に書かれた拍子を生徒が指揮をする

新たな指導法は納得してから

小松：先生のモットーは「してみせて、いってきかせて、させてみて、認めほめる」とのことですが、授業を見て納得した気がしました。

津田：過去の私の授業を見学された方に「先生の授業は進化している」と言われることがありますが、発声法ひとつとっても、自分自身学びながら成長しようと思っています。10年前と発声法が変わっているのは当然です。いろいろ学んだことを実際に自分で試し、そのうえで納得できたことしか取り入れません。

小松：教師は常に、うまい教え方や、子どもに伝わる指導法を求める必要がありますね。子どもたちの技術や意識を高めるには、教師側が積極的に新しい音楽表現を獲得していく努力をしなくてはならないと思います。

言葉選びの秘訣

小松：津田先生が授業で話している中で「これができると、歌がめっちゃうまくなるよ」「先生、ちょっと気取ってみました」など言葉選びが巧みで、これが子どもたちを“津田ワールド”に引き込んでいるのだろうなと思いました。

○つだ・たかし
札幌市立琴似中学校 教諭

津田：授業中に心がけているのは、否定的な言葉を掛けるのではなくて、肯定的な側面から子どもに語り掛けていくことです。「それはまずいよ」ではなくて、「それでいいよ。でも、こうしてみると別の見方もできるよ」と。一生懸命やって出した音やがんばりに対して「そうじゃない」という言葉が、いちばん子どものやる気を失わせる。しかし単純に「うまいね」とほめるのもよくない。具体的に「これがすばらしい」という点を子ども自身が描けるような言葉を選ばないといけません。

グループ学習をさせる前に

小松： 現在「アクティブ・ラーニング」が浸透したこともあり、ほとんどの学校の授業にグループ学習の時間が設けられていますが、今回の授業にはグループ学習がありませんでしたね。

津田： 楽譜の記号の意味も分からず音符も読めない1年生に、グループ学習をさせてもよい結果は出ません。話し合いで「ここはこんな気持ちで歌おう」と決めても、それを表現できる声がなければ机上の空論になってしまう。この段階でのグループ学習は、早すぎると思います。曲を聴いて楽譜を目で追う授業を重ねていくと、子どもたちは楽譜を読むようになります。耳で音を感じながら、音の高さや音価も感じるようになるんですね。少ない授業の中でまずは基礎・基本を、どこまで浸透させることができるかが重要です。

小松： これまでに多くの授業を見学してきましたが、久しぶりに“授業らしい授業を見た”と感じました。最近では、実際に歌うことよりもグループをつくり「僕たちはこう歌います」と考えたり発表したりすることに時間を費やす授業が増えています。グループ学習でなくても子どもたちに考えさせることはできるし、授業での「考える」とは、声を出して歌っている活動の中で「思考・判断しながら歌う」ことだと思うんですね。津田先生の授業はまさに音楽活動の中で子どもたちに考えさせ「こう歌いたい」という気持ちを引き出す内容でした。

津田： グループ学習としては、校内合唱コンクールの時期に各学級で、6時間目や放課後を使いながら曲づくりをする期間があります。そこから生まれた音楽を授業の中でさらに深め、新たな課題を投げかけ学級に返す、という作業を続けます。子どもの「こういう声で歌いたい」という思いに応えることこそ、音楽の教師の役割だと思います。

学校文化と音楽

津田： 各学年春の旅行的行事の中で必ず学年合唱を歌ってきます。3年生の修学旅行では『フィンランディア』『ふるさと』など4～5曲を無伴奏で、宿泊先のホテルのロビーや駅のホームなど、いろいろな場所で歌います。今年は現地でお世話になった「ふるさとガイド」の方々にお礼としても歌いました。聴いてくれる人がいて、聴き終わったら拍手をしてくれて、中には涙を流す人もいて。それが子どもたちのモチベーションを高めてくれます。修学旅行から帰ってくると、歌に魂が一層込められるようになると感じます。そういう姿を目のあたりにし、音楽科以外の先生方が積極的に取り組んでくださり、この5～6年で全校に根付いてきたと感じます。

『Let's Search For Tomorrow』の歌詞「探しに行こう」は指をさしながら何かを見つけたと想像して歌う

小松： 音楽は「学校文化」をつくることができますが、そのためには、先生方の協力が必要であり、信頼を得なくてはいけない。どの教科にも言えることですが、音楽の教師は音楽という教科で何ができるようになるかということを明らかにする必要があると思いますが。

津田： 同じ方向を見て1つのものをつくることで、みんなの心が動く。それが学校文化における音楽じゃないでしょうか。でもそのためには、音楽室から飛び出さなくてはならない。音楽を音楽室の中だけにとどめておくと、狭い範囲でしか感動を共有できません。本物を追求していけば必ず伝わると信じています。

リーダーを育てるには

小松： 黒澤敏行先生は校長として着任されて今年で4年目ということですが、この琴似中学校にいらした頃、体育館で上級生が下級生に専門的な言葉を使いながら分かりやすく校歌の指導をしている場面を見て驚いたそうですね。授業で学んだことが、授業以外でも生きているんですね。

津田： 昨年の3年生が2年生のときの道徳の授業で「恩送り」という内容を学習しました。今までもやっていた活動ですが、先輩たちから受けた「恩」を上級生が下級生に「恩送り」として、自分たちから積極的に動き出し、旅行的行事の前や合唱コンクールの時期には、上級生が積極的に下級生のクラスに行って教えます。校歌の指

音楽室の後方に合唱台が設置されている

揮や指導は、生徒会長が行います。私からは全校生徒に「君たちの代表が、『さあみんな歌おう』と言ったときに、それに応えられる仲間でいてほしい」と伝えています。最初の3、4年間は、生徒会長が行う校歌の指導を私も手伝うことはありましたが、今では私が出なくても、生徒会長が気持ちを込めてしゃべったり、曲を止めて歌い方を説明したりして、校歌という音楽をつくっていくんです。行事のときに生徒会長というステータスをもたせることも必要です。卒業式、入学式では、学年のリーダーも据えて、彼らにスポットライトが当たる環境をつくると、今度はリーダーが育ちます。

小松：生徒会長が合唱の指揮をする学校はよくありますが、ほとんどは「声が小さいからもう1回」といった指示をする程度です。ここでも津田先生の授業で学んだことが生きていますね。まさに音楽が音楽室を飛び出し、学校文化になったといえます。子どもたちが社会に出たときに、どんな仕事をするうえでも、よりよい仲間をつくり出そうとする気持ちをもっているのはとても大きなことだし、それは「音楽」という教科でしか学べないものです。だから音楽の授業が大事なんですよね。

ステージで歌う誇りを

津田：私がこの学校に赴任してきたとき、合唱コンクールは体育館で行われていましたが、当時は今よりも生徒数が多く、体育館に3学年全員が入らなかった。先生方への説明や会場の抽選を経て、3年がかりでホールでの開催が実現しました。ステージは体育館とはまるで違い、緊張感や歌う誇りを感じることができます。

小松：私も最後に勤めた中学校で同じことを行ったことがあります。これまでの「音楽祭」の会場を、体育館ではなく区立の音楽ホールにしようと職員に提案しました。生徒の家庭からそれぞれ400円ほど集めることになり、そのときには反対意見もありましたが、実際にやってみると、区立の音楽ホールでは子どもの緊張感もモチベーションもまるで違う。そんな様子を見た保護者の方々から「翌年も音楽ホールでやってほしい」という希望が出るようになったのです。

最後の5分間の使い方

小松：週に1回という少ない授業の中で、指導において意識していることはありますか？

津田：毎回、次時を見通して指導します。また、子どもたちが自宅でも音取りできるように、合唱コンクールや卒業式で歌う曲の音源を作成して渡していますが、それも踏まえて授業計画を組んでいます。私の授業ではノートをほとんど使わず、楽譜に書き込ませていて、鑑賞のときはワークシートを使っています。

小松：最近は、授業の最後5分間でワークシートに記入させる実践も多いようですが……。

津田：そのような授業の振り返りはしていません。その5分間で、音符の勉強や、指揮をする拍取りの勉強もできますし。授業の評価や振り返りは、私が見取ればいいことで、振り返りは、あくまで自己評価ですからね。時間がたっぷりあればやる意味もあるとは思うのですが、少ない時間をいかに有効に使うかも大切なことだと考えています。

意欲につながる評価とは

小松：今日の授業では子どもたちの学習意欲を感じました。評価ではどのような工夫をされていますか？

津田：実技の評価において、「教えたことで見取る」ということを徹底しています。1年生の1学期の歌のテストでは、これまで教えてきた姿勢と口の開け方を一生懸命実行しようとしているかが重要なので、A評価が多くつくこともあります。教えたことで評価すると、子どもは安心してそれに臨みます。教えてもいないことを指摘して、B評価にするのは間違っている。教えたことと評価の観点を変えてしまうと、子どもからの信頼がなくなると思います。

小松：なるほど。

津田：合唱コンクールのある2学期の歌のテストでは、ソプラノ、アルト、テノール、バスの各パートで「パート・テスト」を行います。皆で協力して、皆で上手になってほしい。子どもたちがA評価を目指して

よりがんばるシステムを作ることで、一生懸命パート練習をするようになります。このシステムでは、合唱コンクール直前の4時間を評価していて、毎回各学級で練習の成果が現れています。

小松： パート・テストで歌ったグループ全員が加点評価になるんですね。確かに、個人だと練習しなくても点を取ることがあるかもしれませんが、パート・テストだとそうはいきません。だから皆が努力する。合唱は1人で歌うのではなくて、皆で歌い合わせることが不可欠ですから、歌い合わせたことに対してプラスして点数がもらえるこのような評価はあってもいいと思います。

津田： 合唱が根付いていない学校では難しいかもしれません。個人の歌については、1学期に独唱のテストをやっています。3年生では1人ずつ皆の前で『帰れソレントへ』をイタリア語で全員が歌い、それが1年間でも重要なテストになっています。

小松： 合唱コンクールの前に合唱づくりの評価をどう評価すべきか悩んでいる若い先生方にとって、たいへん参考になる方法ですね。

津田： 正しい正しくないではなく、子どもたちに意欲をもたせることができる評価の方法の一つだと思っています。

左から津田尚先生、小松康裕先生。
琴似中学校の音楽準備室で

本時の授業の位置付け

合唱コンクールで歌う学年合唱曲『Let's Search For Tomorrow』の学習の2時間目です。

前時までに楽譜の見方や諸記号について学習したり、パート練習の方法と進め方を学び、おおよその音の流れをつかんだりしたうえで、本時は、楽譜を見ながら(指でなぞりながら)、他のパートとの関わりを感じつつ、自分のパートの音を確認していきます。

シンセサイザーから流す「三つのパート音」から「自分のパート音」を強くはっきりと聞き取りながら、心で歌ったり、つぶやくように歌ったりできることを目標に進めていきます。

授業の流れ

	学習の内容、学習活動	指導上の留意点
導入	○ 指揮遊び ○ 姿勢・発声の確認 ○ 発声練習	• 合い言葉「逆ハの字」「かかととお尻と後頭部を一直線」を意識する※。 • 合い言葉「口を縦に開け奥歯を離す」「役者言葉」「ブレスは口から～口形ブレス」を意識する※。
展開	○ 『Let's Search For Tomorrow』 （堀 徹 作詞／大澤徹訓 作曲） • 音取り確認 • 伴奏なしで2部、3部の練習 →伴奏を入れて合唱	音取りは「大声禁止～役者言葉で」 • 「耳10割」唇を動かして心で歌う →「耳6割、声4割」気取った役者言葉で。
まとめ	○ 音符の学習 • 全音符・2分音符・4分音符・8分音符・16分音符	

黒澤敏行 先生
札幌市立琴似中学校 校長

※ 津田尚先生が生徒に意識させる「5つの合い言葉」
①逆ハの字で立つ
②かかととお尻と後頭部を一直線
③役者言葉で歌う
④口形ブレス
⑤唇を縦に開き奥歯を離す

授業者に訊く――2

授業の冒頭、前時の振り返り

音楽のもつ力、音楽に込められた思い

授業者：大関智子（大崎市立鳴子中学校）　**取材協力：舘内聖美**（作曲家）　**聞き手：ヴァン編集部**

２校目は、宮城県の大崎市立鳴子中学校を訪れ、１年生の合唱の授業を参観しました。地元宮城県在住の作曲家、舘内聖美先生にお越しいただき、授業の最後には舘内先生の伴奏で『夢を追いかけて』を合唱しました。生徒たちは作曲者と一緒に演奏できる楽しさを味わっていました。

音楽が流れている学校

Vent（以下V）： 今日は、本時で取り上げた合唱曲『夢を追いかけて』の作曲者である舘内聖美先生とともに、1年生の合唱の授業を参観させていただきました。音楽室のドアが開いていたので、授業中も他の先生方が授業の様子をご覧になっていましたね。

大関： はい、ふだんから開け放しています。クラス担任の先生が一緒に鑑賞をしたり、合唱コンクールの時期には、生徒たちの様子を見に来たりしていくこともあります。

舘内： 音楽が聞こえて、学校全体が楽しい雰囲気に包まれますね。

大関： 音楽室はどこの学校でもたいてい学校の端のほうにありますが、本校は、普通教室のすぐ隣にあります。音に対する配慮がされた設計なので、授業を邪魔することもありません。音楽ではこんな授業をしている、というのを知ってほしいという思いもあり、このスタイルにしています。授業中に聞こえてきた曲について職員室で話題になることもあります。私は、生徒たちが入学したときに「人は言葉を使う前から音やリズムを使ってコミュニケーションをしていたのだから、その音楽を楽しめないのはつまらないよ」と話します。そして卒業するときには「人は自分の命を終えるその瞬間まで音楽と隣り合わせにいます。体の中で鼓動というリズムを打っているのです。それが止まるそのときまで音楽はあなたのそばにいるよ」と伝えています。中学校を卒業したあと音楽の授業がなくなってしまう生徒が7割ぐらいいますが、「音楽は特別なものではなく、生活の中に普通にある」ということを伝えていきたいのです。

舘内： すばらしいですね。そうであるべきだと思います！

校歌でウォーミングアップ

V： 授業の最初には、いつも校歌を歌うのですか？

大関： はい、必ず歌います。歌う場面が始業式や終業式だけだと、校歌を忘れてしまう生徒がいるんですよ。毎時間歌えば少なくとも年に35回は歌えますし……(笑)。加えて、旋律の流れがたいへん美しい鳴子中学校の校歌を、生徒たちに心で味わってほしいという思いもあります。

V： 校歌に続いて、『心ひとつに』を歌っていらっしゃいました。このときは楽譜を見ずに歌っている生徒もいましたね。

大関： この曲は大崎市で生まれた震災復興支援の歌です。1年生は主旋律だけなので、見るか見ないかは、生徒に任せていますが、2・3年生は合唱になるので、楽譜を見て歌うよう指導しています。「楽譜を読めない」と言う生徒もいますが、「音を読めなくても、音の上がり下がりや曲の山が分かるから、歌詞ではなく楽譜を見ましょう」と言って、読譜の学習にもつなげています。

舘内： 大関先生は右手で主旋律を弾きながら、左手で伴奏を弾いていらっしゃいました。それにのせて生徒たちが歌えるので、効果的な方法でしたね。

大関： 私の得意技です(笑)。授業でCDを使うことは、生徒のそばで指導できる利点もあります。でもCDに合わせなければならなくなってしまい、臨機応変に対応できなくなることもありますので、できる限りピアノを弾くようにしています。そうすること

で、生徒たちの声の調子も、自分のピアノとの関係で分かるような気がします。

合唱はまず斉唱から

V： １年生では、どのように合唱に取り組んでいらっしゃいますか？

大関： 最初に教科書の『エーデルワイス』で少し取り組みました。彼らは一生懸命歌っていましたが、「楽しいけれど、うまくハモれない」と悔しそうでした。また、歌うときは「ビジュアルも大事だよ！」と声を掛け、顔の表情や姿勢を意識させています。繰り返し声掛けしていると、どのように表現したいかという気持ちが開放されるのか、不思議と歌詞に合った表情で歌えるようになってきます。

V： 本時では、最初に『夢を追いかけて』の主旋律だけを歌ったあとに、「今歌ったのは合唱かな？ 違うかな？」という大関先生の問いかけがあってから、パート別の練習に入っていきました。

○たてうち・さとみ
宮城学院女子大学音楽科ピアノ専攻卒業。作曲家、ピアノ講師。合唱曲の作曲や小中学校を中心に歌とピアノのコンサート、校内合唱コンクールの審査員などを行っている。教科書に掲載されている『てのひら』『夢を追いかけて』『チャレンジ！』などを作曲（作詞は夫 舘内浩二）。宮城県在住。

大関： まず主旋律を捉えてほしいので、全員で歌うようにしています。そうすると、主旋律が違うパートに移ったときに、そのパートへ意識がいくようになり、役割を考えるようになってきます。

舘内： パート練習だけでは、特に掛け合いになる部分で入るタイミングが分かりにくいと思いますが、主旋律を理解していれば、心の中で主旋律を歌いながら準備できるので、どのような掛け合いになるのかも分かります。これは、主旋律を斉唱したからこそだと思います。たいへん有意義に感じました。

V： １音だけ取り出した練習もしていましたね。

大関： その部分を取り出すことで、一音の変化で斉唱とは雰囲気が変わるということに気付いてくれれば、次にステップアップできると思いました。ユニゾンから短３度のハーモニーになるところですが、この１音で雰囲気がガラッと変わります。感覚的にハーモニーの美しさを捉えることなどを通して、楽しさや美しさを求める気持ちが生まれてくればいいと思っています。

V： 最初は男子の音取りがなかなかうまくいきませんでしたが、最後にある生徒から「明るい感じが不思議な感じに変わった」という意見が出ました。加えて、「ここのソはシャープになってるよ」といった伝え方ではなく、「ラから音が少し下がるよ」という表現で教えていらっしゃいましたね。

大関： 地域的な事情もありますが、ピアノを弾ける生徒があまりいなかったり、コンサートや演奏会になかなか行くことができなかったりと、直接音楽に触れる機会が少ないように思います。吹奏楽部もありませんし……。ですから、たった１音で響きが変わるんだということを感じてもらい、あとから「これはシャープの音だよ」と教える展開でもよいと思っています。

V： 音楽室には、作曲家の肖像画のほかに、今活躍している演奏家の写真やイラスト、絵画なども多く飾られていました。

大関： 例えばベートーヴェンの曲について学習するとき、演奏者による表現の違いを聴き比べますね。同じように、写真を示しながらバロック建築とバロック音楽、印象派の絵画と音楽の関係について話すこともあります。美術と音楽は切っても切れない関係なので、常に意識してほしいと思っています。掲示物は時期や教材によって替えているので、生徒も興味をもって見るようになりました。音楽のバックボーンを感じられるようになればいいですね。

授業を見て感じたこと

V： 舘内先生は、これまでに音楽の授業をご覧になられたことはありますか？

舘内： 合唱コンクールの審査員として学校へ行くことはありますが、音楽の授業は初めてです。みんなが楽しそうに歌っているのが印象的でした。

V： 実際に授業をご覧になられた感想をお聞かせください。

舘内： コンクールの審査ではステージ上での演奏を聞くだけなので、そこに至るまで先生方の指導は大変なのだろうなと思っていました。でも、今日授業を拝見し、あのようなすばらしい歌声がすぐに聞こえてきたのにはたいへん驚きました。また、

中学生ではどのぐらい音が低いと歌いにくいのかな、と作り手としての発見もありました。

大関：『夢を追いかけて』の出だしは確かに低いですが、この曲は高い音もありますよね。

舘内：すみません！（笑）

大関：前時の授業で「先生、音が高いです！」と生徒に言われたのですが、「そうだね。でもきっと歌いたくなるよ」と返しました。みんなその気になったのか、今日の授業では、誰も「高い！」とは言いませんでしたね。「歌いたい！」という気持ちが自然と高い音を歌わせたのではないかと思います。

『夢を追いかけて』の主旋律を全員で歌う

ほんとうは、歌いたい！

V：大関先生にとって、合唱のいちばんの魅力は何ですか？

大関：みんなで歌うことの楽しさです。斉唱では味わえない音の厚みや掛け合いに心が躍りませんか？ さらに、再びユニゾンになったときの“ぞくっ”とする感覚を味わえるのも合唱ならではだと思います。でも実は、私自身、いまだに人前で歌うのが嫌なんです。

V：そうなんですか？

大関：歌うことにコンプレックスをもっていますが、授業のときはいろいろなスイッチをオンにして、「私は女優」のような気持ちでやっています。歌うことが嫌いなわけではありません。ただ一人では……。しかし合唱だったら、みんなの中で自分自身を表現できたという経験があります。生徒たちも同じように「歌うのが嫌だな」と言っていても、歌いたいという気持ちをもっているはずで、音楽が嫌いな人はまずいないと思うんです。

舘内：そこに向き合わせるのはなかなか大変なことですよね。私はピアノを教えていますが、子どもはレッスンに来ると、とりあえず座ってピアノに向かいます。でも、学校ではいろいろな生徒がいるので、「心を一つにして歌おう」というのは、なかなか難しいことですよね。

大関：生徒が「声が変だし、うまく歌えない」と言う気持ちの裏側には、「ほんとうは、歌いたいんだ！」という思いが隠れているような気がします。そんなとき、私は「どんどん歌いなさい」と背中を押します。今日も、声はそろっていませんでしたが、最終的にそろえばいいのです。自分の経験からも、まず自分の声を出すことに対してのバリアを取り除きたいし、それを助けるのが教師の役目だと思っています。活動を通して、ほんの一瞬でも、生徒の目がキラッと輝く、気付くと生徒が一緒に手をたたいて口ずさんでいる。そんな光景を見たら、もう教師はやめられないです。

○おおぜき・ともこ
大崎市立鳴子中学校 教諭

舘内：今日も生徒たちは楽しそうでした。最初の校歌は、私も２番から一緒に歌ってしまいました（笑）。たとえ変な声であろうが、友達のほうが上手だと思っていよう

大関先生がピアノを弾きながら、音取りをする

が、みんな歌えないと言いながらも、ほんとうは歌いたいと思っているはずですね。

大関： 合唱の練習のとき「君たちのクラスはどんなジグソーパズルですか？」とよく聞きます。「ジグソーパズルは全てのピースが違っていて、全部のピースがそろっていないと完成しない。その１ピース１ピースがあなたたちひとりひとりなのだから、あなたのその声も必要なんだよ」と伝えると、生徒は声を出すことに自信をもち始め、とてもすてきな音楽が出来上がります。合唱は音楽的にもいろいろなことを学ぶことができますが、音楽は「つなぐ」ものでもあると思うので、声を合わせるということの先には「クラスづくり」ということがあると思っています。

舘内： 本来の目的はそちらかもしれませんね。それには音楽がぴったりです。合唱曲には合唱ではなければならない理由があって、声を重ねて歌うことは１人では絶対にできません。そのようなおもしろさが合唱を通して分かってくれれば、楽しくなるはずですよね。

大関： 校内のフリースペースに、アップライトピアノが１台置いてあり、だれでも自由に弾けるようになっています。昼休みなどに集まって歌ったり、実習生の先生に歌をプレゼントしたりと、私では思いもつかないことをして楽しんでいます。最初にも言いましたが、音楽は生活の中にあたりまえにあるものですし、選ばれた人だけのものではないというそのものの光景だと思います。

作曲者と一緒に演奏して

V： 授業の最後に舘内先生の伴奏で歌いましたが、その前に、舘内先生から生徒たちにお話しされていました。中でも「Ⓑでは、自分の心の中を見つめる場面に変わるので、主旋律を男声だけにして短調にすることで、違う雰囲気にしました。」というお話が印象的でした。

舘内： 生徒も「今までと何か違う」「よく分からないけれど、不思議な感じがする」といった感想を言っていましたね。

V： 舘内先生の伴奏で歌う生徒たちをご覧になられて、大関先生はどう思われまし

『夢を追いかけて』について、作曲者である舘内先生のお話を聞く

たか？

大関： 楽しそうに歌っている様子を見て、うれしくなりました。やっぱり違いますね！

舘内： 私もうれしかったので、張り切って伴奏を弾いてしまいました。大きな音量で弾けば、生徒たちももっと声を出すだろうと思ったのです。

大関： 私がふだん話していることは「又聞き」というか私が感じたことにすぎません。けれども、今日は作曲者の思いを直接聞いたことで、生徒たちは何かを感じ取ったようでした。さらには、作曲者と一緒に歌うめったにない機会だったので、純粋にうれしかったと思います。最初は大丈夫かなと不安でしたが、実際に声に出して歌ったのを聴いたときに、「こう表現したい」という思いが表情にも姿勢にも声にも表れていて、ちゃんと通じた、何て素直な生徒たちなんだ、と感動しました。そして、まだまだ可能性がある、ここが私のがんばりどころだ、と思いました。今日は生徒にとっても私にとってもほんとうによい経験になりました。ありがとうございました。

左から舘内聖美先生、大関智子先生。
実際にピアノを弾きながら、曲について意見を交わす

本時の授業の位置付け

本時は「合唱へのアプローチ」の第２時です。第１時では主旋律を学習し、全体の流れをつかみました。また楽譜を読み、そこにどのようなことが書かれているのか、どのように歌いたいかを考えました。本時では、パートの役割やハーモニーの響きを感じ取ることから始めます。また、歌詞には作詞者の、旋律やハーモニーには作曲者の思いがそれぞれ込められていることを、作曲者ご本人から伺います。さらには、その思いを生徒一人一人が表現できるよう工夫して歌うことを目指します。

狩野 隆 先生
大崎市立鳴子中学校 校長

授業の流れ

	学習の内容、学習活動	指導上の留意点
導入	○ ウォーミングアップ 校歌／『心ひとつに』	
展開	○ 『夢を追いかけて』の斉唱の響きを復習する。 ・全員で主旋律を歌う。 ○ 合唱の響きを感じ取る ・部分的に取り出して練習する。 ○ 主旋律の動きの変化を感じ取る。 ・「何もできない自分が～」の部分を楽譜通りに歌う。 ○ 響きの変化を感じながら歌う。 ・「くじけそうな～歩き出そう」の部分を楽譜通りに歌う。	・曲全体の流れを理解することで、スムーズな合唱の導入につなげる。 ・音が重なることで、どのように印象が変化したか、話し合うことで考えさせる。 ・主旋律を男声パートが担当することによる響きの変化と効果に気付かせる。 ・パートの重なりや主旋律の移り変わりによる響きの変化を意識させる。
まとめ	○ 作曲者ご本人の言葉を聞き、作者の思いを知る。 ○ 思いをのせて歌う。	

これからの学び③
～新学習指導要領のポイント

特集

これまで２回にわたり、佐賀県教育センターの副島和久先生に、新学習指導要領について伺ってまいりました。今年６月に、文部科学省より学習指導要領解説が示されましたので、先生方が具体的にどのように指導計画を作成し、授業に取り組めばよいのか、副島先生に解説していただきました。これからの授業づくりの参考にしていただければ幸いです。

Q. 今回の改訂でいちばんのポイントとなるところはどこでしょうか?

今回の改訂では、**「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる」**ということがこれまで以上に大切にされています(中学校では**「音楽文化」**が付加されています)。授業で学んだ音楽がどのように社会とつながっているのかを子どもに意識させることが重要です。例えば、学校行事や学校外における音楽活動などとの関わりを通して、子どもが「音楽が役に立っている」「音楽があることで生活が豊かになる」と自覚し、生涯にわたって音楽と主体的に関わっていけるようにすることが大切です。「社会に開かれた教育課程」の実現を目指していく中でのポイントだと思います。

また、今回の改訂では、育成を目指す資質・能力が**「知識及び技能」「思考力, 判断力, 表現力等」「学びに向かう力, 人間性等」**の**「三つの柱」**で整理されたことにより、音楽科における「知識」が明確になりました。例えば、各学年の目標には**「曲想と音楽の構造などとの関わり」**(中学校では**「背景」**が付加)と示されています。一見、学習指導要領そのものが難しくなっているような印象を受けますが、音楽科において指導すべき事項が明確に示されたという意味ではとても意義深いことです。ここでいう「知識」の捉え方を見誤らないことが大切です。

イラストレーション：ソリマチアキラ

Q. 学習内容は増えたのですか？

基本的には増えていません。先程述べたように、音楽科で育成を目指す資質・能力が「三つの柱」で整理されたことにより、学習指導要領の枠組みが変わり、これまでの指導事項を細分化して示されているので、大きく変わったようにも見えますが、学習する内容が増えたのではありません。このことにより、音楽科においては、これまであいまいにされてきた「知識」が、子どもたちが学習する内容として明確に示されたということも先程述べたとおりです。

ただし、教科書に載っていることのみを「知識」として捉え評価したり、「間違えずに吹けたか」といったようなことだけを「技能」として評価したりするようになってしまわないかという危惧もあります。「知識」及び「技能」は、「思考力, 判断力, 表現力等」の育成と関わらせて習得しなくてはいけない、ということが随所に書かれています。音楽科における「知識」には、

①音や音楽を伴わなくても得られる知識(教科書に載っているようなこと)

②音や音楽を知覚・感受することによって得られる知識

があります。大切なのは、これら①②を関連付けて考えることで得られる知識にもしっかりと目を向けるということです。例えば、「*f*」＝「強く」と覚えることも必要ですが、実際に音楽を聴いたり演奏したりすることを通して、「ここでのフォルテは堂々とした感じが出るように」と、自分なりに考えたイメージなどと関連付けて理解することも大切です。

Q. 「アクティブ・ラーニング」という言葉に代わって示された「主体的・対話的で深い学び」を、どのように考えればよいでしょうか？

「主体的・対話的で深い学び」を実現するということは、音楽科で育成すべき資質・能力をよりよく身に付けるための「手立て」であって、それ自体が目的ではありません。多くの先生方にとっては、これまでの授業のやり方を根幹からあらためるのではなく、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」が実現できているかという視点で自らの授業の見直しを図り、三つの資質・能力がよりよく身に付く授業に変えていくことが求められます。まさに「授業の質的改善」です。

「主体的な学び」「対話的な学び」はおおよそ他教科でも同じ方向性で捉えることができます。「対話的な学び」に関わって、「音楽科の特質に応じた言語活動」は音楽科に特化した部分ですが、「対話を通して自分の考えを深め広げる」ということは、他教科とも共通に考えられます。それらに対し、「深い学び」は「“音楽科ならではの”深い学び」である必要があります。子どもたちが「音楽的な見方・考え方」*を働かせながら音楽と関わることで、音楽科ならではの「深い学び」に通じていきます。

> *「音楽的な見方・考え方」
> 音楽に対する感性を働かせ，音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え，自己のイメージや感情，生活や（社会，伝統や）文化などと関連付けること
>
> ※中学校は（　）の部分も含む

この前半については、おおよそ次のように読み替えることができると考えます。

「音楽に対する感性を働かせ」
　＝音や音楽を「知覚・感受」すること
「音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え」
　＝音や音楽を〔共通事項〕の視点で捉えること

つまり、これまでの学習指導要領においても、大事にしてきたことです。

一方で、後半の「自己のイメージや感情，生活や（社会，伝統や）文化などと関連付ける」の部分は、今後なお一層の充実を図るべきであると考えています。特に「生活や（社会，伝統や）文化などと関連付ける」ということについて、指導者である教師が、音楽が生活や社会で果たす役割や、伝統や文化との関わりをしっかりと認識し、このことを子どもたちに実感させることが大切です。「音楽的な見方・考え方」を働かせた学習を積み重ねることで「深い学び」が実現し、三つの資質・能力がよりよく育まれます。さらに、子どもたちの「音楽的な見方・考え方」も成長し、生涯にわたって生きて働くものとなります。

○そえじま・かずひさ
佐賀県教育センター研究課 課長

Q. 「音楽科の特質に応じた言語活動」とは、どのようなことでしょうか？

音楽科の授業では、他者と関わりながら学習していく「協働的」な部分がたくさんあるので、言語活動の充実を図ることはこれまでも大切にされてきました。一方で、このことについての誤った理解が、音楽がない中でひたすら話し合うといった授業を生み出したことも否めません。このような実態を踏まえ、新学習指導要領では、音や音楽と言葉を上手に組み合わせながらコミュニケーションを図ることを求めています。これが「音楽科の特質に応じた言語活動」です。例えば、表現活動において、「デクレシェンド（decrescendo）して静かに終わりたい」という思いや意図を言葉で伝え合ったら、その部分を何度も歌ったり演奏したりしながら確かめたり、鑑賞活動では、「トランペットによる旋律によって力強い感じの音楽になる」という気付きを言葉で伝え合ったら、再度その部分を聴きながら確かめたりすることです。このような言語活動が大切になります。

また、子どもの語彙力を考慮した言語活動を計画的に仕組むとともに、語彙を豊かにしながらステップアップを図っていくよう指導を工夫するということも重要です。小学校の低学年であれば、低学年なりの語彙を用いつつ、必要に応じて体を動かしたり絵を描いたりするなどの表現活動も交えながら、言語活動を充実させることが大切です。

Q. 指導計画を作成するにあたり、大切な点を教えていただけますか？

現行の学習指導要領では、例えば、中学校第１学年創作の指導事項アを例にすると、

> 言葉や音階などの特徴を感じ取り，(知識)
> 表現を工夫して(思考力，判断力，表現力等)
> 簡単な旋律をつくること(技能)

と、１つの指導事項の中に思考、判断し、表現する一連の過程がとてもコンパクトに示されていました。一方で、感じ取る対象である「言葉や音階などの特徴」は知識として理解させるべきかがあいまいであり、指導者である教師の判断に委ねられていた面もありました。

新学習指導要領では、小・中学校どちらも同様ですが、

> 「A表現」は、ア(思考力，判断力，表現力等)
> イ(知識)
> ウ(技能)
> 「B鑑賞」は、ア(思考力，判断力，表現力等)
> イ(知識)

とそれぞれの資質・能力に分けて示され、それらを適切に関連付けながら指導計画を作成することが大前提です。どのように関連付けるかは教師が判断するところですが、例えば、イ(知識)とウ(技能)だけを取り出して指導する題材を計画するなど、「A表現」はア、イ、ウ、「B鑑賞」はア、イの全てを関連付けないで指導計画を作成することは考えられません。

また、年間を通して、領域・分野、取り扱う指導事項や〔共通事項〕などのバランスがとても大切です。例えば〔共通事項〕の取り扱いでは、「音色」「強弱」など子どもにとっても理解しやすく、教師にとっても指導しやすい要素がよく取り扱われるのに対して、「音楽の縦と横の関係」「テクスチュア」「構成」といった要素は敬遠されがちのように思います。しかし、合唱や合奏の活動では「音楽の縦と横の関係」「テクスチュア」を扱わないことはあまり考えられませんし、音楽の全体を捉えようとするとき、「構成」はとても重要な要素となります。子どもや学校の実態を踏まえて、バランスの取れた指導計画を作成しましょう。

Q. 〔共通事項〕の考え方は、どのように変わりましたか？

〔共通事項〕も資質・能力が「三つの柱」で整理され、アは「思考力，判断力，表現力等」、イは「知識」に位置付けて示されました。したがって、アでは、知覚・感受するだけでなく、「知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること」までが求められていることが大きな変更点です。しかし、これまでも知覚と感受の関わりについて考えることは多くの授業の中で行われていました。例えば、「フルートで演奏されるなめらかな旋律」(知覚)と、「爽やかな風が吹いているような感じがした」(感受)を関連付けて、「爽やかな風が吹いているような感じがしたのは、フルートがなめらかな旋律を演奏していたからだ」と捉える学習は、現行の学習指導要領でかなり定着してきたと思います。このように、新学習指導要領では、これまでの指導で大事にされてきたことを明確化して、更に充実を図ることができるようにしている部分が多くあります。

なお、小学校では、「問いと答え」が「呼びかけとこたえ」とされるなど、〔共通事項〕に示されている「音楽を形づくっている要素」について、一部整理されています。

Q. 教材の選択は、どのようなことに配慮すればよいですか？

今回の改訂では、音楽科の目標に「生活や社会の中の音や音楽(，音楽文化)と豊かに関わる資質・能力を(中略)育成することを目指す」と示され、中学校の歌唱や器楽の教材を選択する際の配慮事項には「生活や社会において音楽が果たしている役割が感じ取れたりできるもの」と新たに示されています。例えば、オリンピックなどのテーマソング、震災のときに被災者を勇気付けた音楽など、音楽が生活や社会の役に立っていることを感じられる教材はいろいろあります。学校生活においても、学校の校歌や卒業式の式歌など、学校生活を豊かにするための音楽があります。子どもや学校の実態に応じて、このような音楽を教材として取り上げ、音楽が果たして

いる役割を子どもとともに考えることは意義あることだと思います。また、その他の配慮事項についても、これまで同様、大切にしてほしいと思います。

地域の音楽会などが計画され、子どもたちが音楽科の授業で学んだことを発表する場が準備されていることは大変よいことです。しかし、音楽会で発表することが目的化してしまい、音楽の授業がそのための練習の場と化している現状も一部に見受けられるように思います。子どもや学校の実態を考慮せず難しい教材を選んでしまっているようなことはないでしょうか。限られた授業時数の中で音楽表現を創意工夫する活動までを見通して、実態に合った教材選択を心掛けたいものです。状況はさまざまですので、実際に指導に携わっている先生方の教材を見極める力がとても大切です。

Q. 「我が国や郷土の(伝統)音楽」の指導に関わってはどのような点が変更されましたか？

今回、小学校で取り扱う旋律楽器として、3・4年生にも「和楽器」が例示されています。中学校は、平成10年の学習指導要領に「和楽器について(中略)楽器を用いる」とされていたのが、平成20年の改訂では「よさを味わうことができるよう工夫する」とされました。さらに今回の新学習指導要領では、**「よさを味わい，愛着をもつことができるよう工夫する」**と新たに示されました。これまでの成果を踏まえて、確実にステップアップしているのが分かります。また、中学校の学習指導要領解説では、我が国の伝統音楽に関する用語や記号の説明が丁寧に示されており、これからの指導の充実につながると思います。

Q. 最後に、全体を通してひと言お願いします。

最初の話と重複しますが、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育てる」ということが新学習指導要領の最も大切な部分ではないかと思っています。小学校や中学校で「教科」として音楽を学ぶ意味について教師自身が再認識するとともに、そのことを子どもたちに実感させることができる授業を展開していきたいものです。「音楽を学ぶことで、子どもたちにどのような幸せが訪れるのか」「音楽を一生懸命に学んだ子どもたちはどのような大人になるのか」といったことに思いを馳せながら、「そのために、我々教師は今、何をすべきか」を考えていきたいと思います。新学習指導要領は、このような先生方にとっての指針となるものだと思っています。

また、芸術教科、とりわけ音楽科は、知性と感性の両方をしっかりと働かせて学ぶ教科であると思います。当然、「音楽活動の楽しさを体験することを通して」学ぶということになります。現行の学習指導要領による音楽科教育において、「音楽は感じればいい」「音楽は楽しければいい」といった偏った価値観による授業はかなり払拭されてきたように思います。友達と関わりながら音楽活動の楽しさを体験する中で、これまで身に付けた知識や技能を活用して、音楽表現を創意工夫したり、音楽のよさや美しさを聴き味わったりすることや、その過程で新たな知識や技能を身に付けていくことが大切になるのだと思います。

新学習指導要領の趣旨は、これまでの音楽科教育の方向性と大きく変わることはありません。むしろ、これまで大切にしてきたことをさらに力強く打ち出したものになっているように思います。義務教育9年間を見通した小・中学校の系統性についても、現行の学習指導要領以上に整理されたものになっています。この学習指導要領の趣旨や内容をよりよく理解していただいた小・中学校の先生方が、それぞれの学校において「授業」という形で具現化してもらったときに、この学習指導要領は意味を成すものと思います。これまでの音楽科教育におけるすばらしい実践の蓄積を大切にしながら、更なる飛躍の10年が訪れることを楽しみにしています。

Makiko Kinoshita　Yuta Miyake

木下牧子 × 三宅悠太 対談

作曲家はどんな気持ちで詩に向き合っているか

司会＝坂元勇仁

現代の合唱界をリードする人気作曲家の対談が実現しました。幅広いジャンルに数々の名曲を書き上げている木下牧子先生と、「Nコン2016」の課題曲を作曲した気鋭の三宅悠太先生。お２人はこれまでどのように詩と出会い、どんな気持ちで詩に向かい音楽を書いてきたのか。そしてご自身にとっての「詩」とは──。作曲家の本音に迫りました。

詩人と作曲家

坂元勇仁：本日のテーマは「作曲家はどんな気持ちで詩に向き合っているか」です。私はいつも合唱曲において、詩人が不遇であるのに対し、作曲家が優位であるように感じています。コンサートに行くとプログラムに作詞家の名前が抜け落ちていることもあります。今日のスプリングセミナー（教育芸術社主催／3月28日・横浜みなとみらいホール）では木下牧子先生の『散歩』が初演されましたが、おそらく皆さんはこの曲を“木下牧子さんの『散歩』”と呼ぶでしょう。多分作詞者である“長田弘さんの『散歩』”とは言わない。合唱曲は本来、作詞家と作曲家が五分五分の関係であるはずなのに、作曲家が優位になっているわけです。

以前木下先生は、日本語に特化した合唱コンクールを開くとよいとおっしゃったことがありましたが、今年の１月に島根県芸術文化センター（通称：グラントワ）で、私自身が企画に携わった合唱プロジェクト「グラントワ・カンタート2017」の「“あゆむ”コンクール」という日本語歌唱による合唱コンクールが開催されました。

人々の詩に対する関心が、以前に比べて高まっていることを実感しました。

○ 坂元勇仁（さかもと・ゆうじ）
レコーディング・ディレクター、大阪芸術大学客員教授。学習院大学大学院博士前期課程修了。ビクターエンタテインメント株式会社ディレクターを経て、有限会社ユージンプランニングを設立。主な制作作品として『原典による 近代唱歌集成 誕生・変遷・伝播』『アジアの音楽と文化』（ともにビクターエンタテインメント）などがある。ディレクターを担当した『漆原啓子&漆原朝子 無伴奏ヴァイオリン・デュオ』（日本アコースティックレコーズ）が平成26年度文化庁芸術祭レコード部門優秀賞を受賞した。著書に『明日も会えるのかな？　群青 3.11が結んだ絆の歌』（パナムジカ）、共著に『はじめてのインターンシップ 仕事について考えはじめたあなたへ』（アルテスパブリッシング）がある。

そのとき、人々の詩、あるいは詩人に対する関心が、以前に比べて高まっていることを実感したんです。そこであらためて、お２人の詩に対する気持ちを聞いてみたいと思いました。まず三宅先生は、詩についてどのようにお考えですか？

三宅悠太：想像力を豊かにしてくれたり、日々の喧騒の中で忘れかけている純粋さや深い視点といったものを、真に与えてくれたりする存在と感じています。詩は本来独立して存在していますので、心を動かされた詩が必ずしも音楽とつながるわけではありません。よいと思った詩を温めていると、自分の中で昇華され満たされていき、作曲というアクションに至らないことも多々あります。

坂元：ふだんはどのように詩を探しているのですか。

三宅：図書館はもちろん、最新刊や未発掘の詩との出会いを求めて書店によく足を運びます。特に丸の内に好きな書店があり、よく通っています。また、Amazonのヘビーユーザーなので……好きな詩人の新作が出ると中身を見ずにどんどん買っていくことも。

日本歌曲──「特殊」が「普通」に

木下牧子：坂元さんは、詩人が不遇とおっしゃいましたが、熱心な先生方は道徳の時間に詩の内容について話し合ったり、印象を絵に描かせたりして、詩の解釈にはとても熱心ですし、時間も割いていますよね。ただ詩を頭で解釈することと、具体的に言葉を音楽にのせることは別なんです。歌詞を伴う曲では、言葉をいきいきと旋律にのせることができないと、音楽の真価は発揮できません。日本語に特化したコンクールを提案したのは、何となく「気持ちを込めて歌う」のでなく、もっと日本語の特徴をつかんで、自然な発声と音楽の流れの上に、いかに言葉を巧みにのせるかというテクニックを磨くべきだと思うからです。作曲していると、声楽曲のみならず器楽曲を書いていても、自分の音楽のフレーズの根幹は母国語だと痛感します。母国語である日本語をよく理解していないとほんとうの音楽は書けないし、演奏もできないと思うんです。私は歌曲も多く書いていて、今年は「奏楽堂日本歌曲コンクール」と座間市の「日本歌曲コンクール」で審査員を務めますが、合わせて350人を超える参加者があるようです*。若い声楽家

＊ 平成29年度奏楽堂日本歌曲コンクール（５月11日～28日、台東区生涯学習センター ミレニアムホール）、座間歌曲祭2017『第１回日本歌曲コンクール』（４月17日～23日、ハーモニーホール座間 大ホール）

左から坂元勇仁さん、三宅悠太先生、木下牧子先生（2017年３月28日・横浜みなとみらいホール リハーサル室）

の日本歌曲への意識は明らかに高まっていると感じます。合唱と連動できればうれしいですね。

坂元：しかし、いまだに日本歌曲を歌わない人たちもいるようですが。

木下：私が学生の頃、日本歌曲は特殊なものでした。20年前に私が最初に歌曲集を出した時も、出版社に歌曲集ほど売れないジャンルはないからやめてほしいと言われたものです。でも「合唱で日本語作品の人気があるのだから、歌曲もこれから絶対に広まっていくから」と説得しました。今は多くの作曲家の歌曲集が次々と出版されています。

坂元：昨年も木下先生の歌曲集が出版されましたね。

木下：全部で７冊になりました。中学校・高校時代に合唱で日本語作品に親しんだ人は、音大に入っても自然に日本歌曲を歌ってくれます。全てが連動しているのです。

推敲に推敲を重ねて

坂元：合唱曲が歌曲になることはありますか？

木下：歌曲になる曲とならない曲があります。ポリフォニックな作品は歌曲にはしません。シンプルな作風でメロディーが力をもっている曲は、歌曲にしても映えますね。

坂元：合唱曲の作曲にはどのくらい時間をかけるのですか？

木下：『方舟（はこぶね）』とか『ティオの夜の旅』などの４～５曲構成の20分くらいの組曲だと３か月はかかります。『愛する歌』の中の「ロマンチストの豚」とか「さびしいカシの木」など、シンプルで３番繰り返すような小曲は１週間かからない場合もありますが、ほとんどの場合、時間をかけて曲を仕上げます。とにかく推敲に推敲を重ねて作曲するタイプなんです。できたと思っても一日寝かせて翌日推敲して、また寝かせて推敲して。陳腐に思えた箇所をほんの数音変えただけで、見違えるように輝きのある曲になったりします。とにかく推敲して音楽を徹底的に磨き上げることで、私の音楽の個性は生まれているように感じます。

道筋が見えた時

三宅：中学生の頃は合唱部。それこそ僕は木下先生の歌と共に育ってきました。その後、高校に入り初めての合唱曲を書き、東京藝術大学２年生の頃には初の歌曲を書きました。以来、詩をもとに音楽を紡ぐ機会が多くなりましたが、詩は感性だけでなく自分の音楽性をも広げてくれる存在のように感じています。

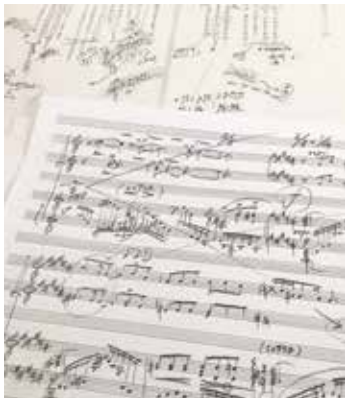
坂元：作曲家の萩原英彦先生はいつも服のポケットに詩を書いた紙を入れていて、ぐちゃぐちゃになるまでずっと読んで、読み終わったら曲ができていた（笑）、という逸話を聞いたことがあります。そこまで詩を読み込むことはありますか。

三宅：はい、歌曲や合唱曲などを書くときにはまず詩を読み込みます。ただ、先ほどお話ししましたように詩は詩だけで存在意義があるものですので、自分なりの“音楽化する必然性”のようなものが見いだせないと、形にはなりません。「魅力的な俳優さんや詩人がその詩を朗読したほうがおもしろい！」となると、作曲家は立場がありませんし（笑）。音を紡ぐことで詩に新たな光があたるとか、世界が広がるとか、聴き手との間に何か風通しが生まれるとか……そうした自分なりのポジティブな変換が生まれる道筋が見えたとき、音楽と結び付いていくような気がします。

坂元： 音楽としてインスパイアされる詩に傾向はありますか？

三宅： 谷川俊太郎さんの詩に多く存在するような「調べ」とでも言うのでしょうか、詩にリズムや流れがあるものに特に惹かれます。その言葉の流れどおりに音楽を書くかと言われるとまた別ですが、言葉たちがいかに音楽の中で自然に存在し流れていくかということを作曲時にいつも考えますので、詩がもつ「調べ」の存在はやはり大きいですね。

坂元： 木下先生はセンセーショナルなデビューでしたね。その後、実はスランプもおありだったとか。



三宅先生の作曲スケッチ。
3月28日のスプリングセミナー2017で
初演された『はじまりはひとつのことば』
の一部

木下： 最初の合唱組曲『方舟』は、大好きな詩にのびのび曲を書いたら人気が出てしまったという印象です。初演（1980年／鈴木成夫指揮、東京外国語大学混声合唱団コール・ソレイユ）がすばらしかったおかげですね。それまで現代音楽のコンサートでは、律儀な拍手しか経験していなかったので（笑）、『方舟』で会場が熱狂したのを見て、音楽にはこんな力があるのかと思いました。当時はオーケストラを立て続けに書いたあげく、スランプに落ち込んだ時期だったので、しばらく合唱曲を書けという神様の声だと思いました。修行だから、自分を引き上げてくれる質の高い詩のみをテキストに選び、詩からパワーをもらいながら作曲したことで、器楽のスランプからも抜け出すことができたと思っています。今でも、テキストは心底共鳴できる詩しか選ばないようにしています。

**詩は感性だけでなく、
自分の音楽性をも広げて
くれる存在のように
感じられてきました。**

○ 三宅悠太（みやけ・ゆうた）
1983年東京都生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業、同大学院修了。奏楽堂日本歌曲コンクール第12回作曲部門第１位、第79回日本音楽コンクール作曲部門（オーケストラ作品）第１位、併せて岩谷賞（聴衆賞）および明治安田賞受賞。管弦楽、室内楽、舞台音楽、合唱曲、音楽教材など多岐にわたる作・編曲を手がけている。合唱分野では東京混声合唱団やharmonia ensembleなどをはじめとする委嘱の他、2016年には第83回NHK全国学校音楽コンクール高等学校の部課題曲《次元》を作曲。これまでに作曲を浦田健次郎、塚本一実、小山薫、土田英介、野平一郎の各氏に師事。桐朋学園大学講師などを経て、現在、文教大学教育学部、聖心女子大学文学部、都立総合芸術高等学校音楽科、各非常勤講師。

三宅先生の自宅の棚に並んだ詩集

坂元： そのように詩に出会って、「これだ」と思って書いた曲が、歌い手の皆さんに届いて歌われるのですね。

歌い手への願い

坂元： 歌う人たちへの希望ってありますか？

木下： 以前「宝塚国際室内合唱コンクール」の審査をしたとき、他の国々と比べて、日本の合唱団の声はどこも響きが薄く固めに感じました。特にルネサンス・バロック部門で。「日本語はウの母音を浅めに」という方がいますが、私は、何語であれ基本の発声は同じで、響きの豊かな自然な発声であるべきだと思います。浅く歌えば言葉は聴こえるかもしれませんが、喉をやられますし、大きい会場では通用しません。合唱では、難しい曲の音取りに時間を多く使いますが、基本の発声にもう少し時間をかけてもよいと思います。

三宅： 作曲家が思っている以上に、演奏者は「音の意味」を深読みしている印象を受けます。「ここで和音が変わるのは、詩をどのように解釈したからでしょうか」「さっきは休符があったのにここでなくなっている理由は、詩とどのようにかかわっていますか」等々。楽譜上の全てが、詩やその解釈を説明するために書かれているわけではありません。一音一音に〝音楽的〟な必然性はあるべきだと思うのですが、テキストのある作品の場合は特に演奏者側が〝音楽外的〟な意味を見いだそうとする傾向が強い印象を受けますね。器楽で演奏する際にも共通するような、音のエネルギーの推移や方向性、リズムの変化、和音の変化……このようなものをベースに作品と向き合い、そのうえで詩や言葉をのせ、どう表現していくのかを考えていただきたいと思います。塩梅が難しいですね。

坂元： 作曲家としては言葉は全て聞こえたほうがよいのでしょうか。

木下： 曲によります。同じ言葉が繰り返し出てくるときは、最初の１回だけ聞こえれば、あとは動きとして聞こえればいいという場合もあります。ストーリーを物語る場合は、全ての単語が朗読のように聴こえてほしいし。前衛詩を使ったり、複数の詩を同時に使ったりして言葉は聴こえなくていい、という書き方もあるかもしれません。色々です。

三宅： 聞こえてほしいところで聞こえるように書いているつもりなのですが（笑）、演奏者側のテクニックも必要ですよね。特にポリフォニー。発音の工夫はもちろん、音の重心や響きの方向性など、さまざまなアプローチの合わせ技が大切ですね。

日本語の聴かせ方

◆質問コーナーで

男性： 言葉を分かりやすく歌うための、具体的な方法を教えてください。

木下： 日本語は均等にシラブルで割ればいいと思っている人が多いようですが、それでは言葉に聴こえません。日本語にもイントネーション（抑揚）とストレス（強勢）があり、イントネーションにはいつもメロディーが寄り添って支えるからいいとして、問題はストレス。私は日本語のストレスはいつも第1シラブルにくると思っています。つまり全ての単語において、最初のシラブルをはっきりさせないと意味が聴こえにくくなる。ただストレスといっても微妙で、アクセントを付けたり強く発音したりしては不自然になります。私の考えでは、単語の頭のシラブルの子音を少しだけ早めに準備し、そこに母音をたっぷり吹き込むことかなと。音を大きくするのではなく息をたっぷり。合唱では子音が硬くなりやすいですが、歌う子音は全体にもっと丁寧な柔らかいものだと思います。子音を早めに準備して、そこにたっぷり母音を吹き込む。全ての単語でそれをやってみると、意外に言葉が聴こえてくるかも……。当たり前すぎることですが、案外それができていない。

男性： 音大で日本歌曲の授業は増えていますが、今のような具体的なテクニックにはあまり触れていないと思います。私も詩の世界観や曲の傾向などを主に考えがちでした。このようなことを、音大生ももっと学ぶべきですね。

木下： 皆さん、深いことを考えているんです。だけど「私はあなたのことが好き」という歌詞があったとして、第1シラブルを持ち上げなければ「たしは・なたの・とが・き」と聞こえてしまう。それでは詩の世界観以前に、日本語のはずなのに言葉として聴こえないイライラ感を聴き手に与えてしまいます。

三宅： 大学在学中に声楽科の友人のピアノ伴奏をしていましたが、外国語作品の演奏を通して培われる母音の響かせ方が、日本歌曲を歌う際にもそのままの形で用いられているシーンに、何度も出会いました。母音の深い響きや緊張の中に、日本語の子音や言葉のニュアンスが取り込まれて（埋もれて）しまい、楽譜を見ていなかったら日本語であることに気付かないことも（笑）。そして母音自体もモノトーンな傾向に……これらは全て、合唱においても同じことが言えますね。

木下： 私は、音大生が在学中、発声を中心に学ぶこと自体は賛成

木下先生の自宅の仕事部屋

詩にパワーをもらいながら作曲したことで、器楽のスランプからも抜け出すことができたと思っています。

○ 木下牧子（きのした・まきこ）
東京都生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科首席卒業、同大学院修了。大学院在学中に吹奏楽曲「序奏とアレグロ」と合唱組曲「方舟」を発表してプロ・デビュー。日本音楽コンクール作曲部門（管弦楽曲の部）入選。日本交響楽振興財団作曲賞入選。三菱UFJ信託音楽賞奨励賞受賞。主要作品に、オーケストラのための「ルクス・エテルナ」、ピアノ・コンチェルト、吹奏楽曲「ゴシック」、室内楽「ねじれていく風景」、ピアノ曲集「夢の回路」、合唱組曲「ティオの夜の旅」ほか多数。CDに「室内楽作品集～もうひとつの世界」（レコード芸術 現代音楽部門 特選盤）、「祝福～無伴奏合唱作品集」他。出版多数。公式サイト　m-kinoshita.com
※10月5日東京文化会館小ホールで「木下牧子作品展４ PIANO PLUS」を開催予定。

です。基本的な発声をしっかり学んだ歌手は、一生強い。安定した発声があってこそ、いろいろな言語の特徴を掴んでのせることができると思うんです。歌い手の皆さんには、発声の勉強と同時に、学生時代から美しい日本語を声にのせる技術を開拓してほしい。ドイツ語やイタリア語はあれほどディクション（発音・発声法）にこだわるのに、日本語だけ「気持ちをこめる」という根性論で済ませるのはおかしい。若い方たちが日本歌曲を普通に歌ってくれて、作曲家も合唱曲や歌曲をどんどん書いている今こそ、日本語を深める時期かと思います。

言葉への挑戦

坂元： 新しく、チャレンジしてみたいことはありますか？

三宅： 従来の言語を離れて、架空言語の曲を書いてみたいです。言葉の制約から完全に離れて、何がなんだか分からないけれど、自由で。時には言語のようにも聞こえて。器楽みたいなものでしょうか。あくまで音楽の中で、何語でもない響きでつくっていくというのは絶対やりたいことです。

木下： 一番好きな詩集が蔵原伸二郎さんの『岩魚』なのですが、円熟の境地に達したら蔵原さんの詩に曲を付けてみたいですね。それからこの秋、朗読・歌・クラリネット・ピアノのための『蜘蛛の糸』という作品が音楽之友社から出版されます。芥川龍之介の短編のほぼ全てをテキストに使ったもので、たった３人（朗読と歌は１人で担当）でオペラのような濃密な世界をつくり出せたと思っています。オペラも書きたいけれど、こうした音楽劇もおもしろいです。

坂元： 楽しみにしています。ありがとうございました。

対談データ

「スプリングセミナー2017／トーク・セッション」から
日程：2017年３月28日
会場：横浜みなとみらいホール リハーサル室

パックンと考える

ことば・コミュニケーション

［最終回］ たくさんコミュニケーションをしよう！

**お笑い芸人パックンマックンのパックンこと、パトリック・ハーランさんに
お話を聞く連載も、いよいよ最終回です。
パックンの視点から見た日本の学校教育や、新学習指導要領で教科化される
小学校での英語教育について、お話しくださいました。
最後にはパックンからみなさんへの熱いメッセージもあります！**

日本の学校には いいところがたくさん

──お子さんの学校や授業を実際にご覧になることはありますか？

パックン：もちろんです。授業参観にはたいてい出席しています。PTAの活動にも参加していて、地域のPTA冊子の表紙に載ったことがあります。先日は音楽発表会にも行きました。

──日本の学校教育でここはいいな、と思うことはありますか？

パックン：山ほどあります！ 自分の子どもを日本の公立小学校に通わせているのは、経済的な理由もありますが、それだけではなく、よいと思う面が多いからです。例えば掃除です。生徒が自分たちの学び場を掃除する、これほどすばらしい制度はありません。みなさんにとっては掃除をするのはあたりまえのことかもしれませんが、アメリカの学校には掃除係のおじさんがいるので、子どもは掃除をしません。掃除の習慣がないので、ゴミが落ちていても拾うという意識がなく、逆にどうせ誰かが拾うだろうからと、人が見ていないときにポイ捨てをする子どもも多いんです。

──他にもいいところがありますか？

パックン：まだまだあるので言わせてください！「前へならえ！」も嫌いじゃないですよ。アメリカにはありません。これによってちゃんと規律を守ることができるのはすごいと思います。日本の教育は基本的に全体を底上げするという方針ですよね。弱点もあるかもしれませんが、ほんとうに重い障害を抱えている子を除いては、みんな一緒に勉強しています。いろいろな子が授業に参加していることによって、お互いを理解できるようになるのです。また、勉強が苦手な子も得意な子も

平等に扱うという先生の態度も、社会人としてよいお手本になっています。性格や生き方、触れ方、接し方を覚えられます。

それから、音楽やアートを大事にしています。アメリカの公立学校では、予算がないために授業がどんどん削られているんですよ。

さらには、どんなことも改善しようとしていますよね。この20年間で教育は大きく変わってきましたし、よくなっていると思います。「ゆとり教育」から「脱ゆとり教育」に方針を転換するなど、時代やニーズに合わせて柔軟に方向を変えて実行していくのもすばらしいことだと思います。アメリカの学校教育は、宗教的、風習的な理由で偏る場合が多いのですが、日本では科学的な根拠をもとに論理的に考えて改善していると思います。

イラストレーション：小島真樹

しゃべることも大事

──逆に、ここが日本の教育で疑問だと思うことはありますか？

パックン：日本では基本的に授業中の私語は禁止されていますが、僕はそれを直してもいいんじゃないかなと思うんです。先生にとっては私語がないほうが授業を進めやすいでしょうし、先生が話している間は静かに話を聞くというのが当然なのですが、それ以外のときは、「しゃべってください！」と言いたいです。僕の子どもの授業参観に行ったとき、先生が「はいみなさん、ロッカーから定規を持ってきて」と指示を出し、子どもたちが立ち上がって定規を取りに行ったのですが、そのときに子どもたちがおしゃべりを始めました。そこで先生が「誰が話していいって言いましたか？ 静かに！」と私語を注意したのを見て、すごくショックでした。だらだらしゃべりながら、何もせずに立ち話になったら困るけれど、定規を取りに行って戻ってくる間ぐらいは、話してもいいんじゃないかなと思うんです。規律も大事ですが、自由や個性も大切です。

──コミュニケーションの基本は話すことだと思いますが、教育の中でしっかりと身に付けるためには、どのようにしたらよいでしょうか？

パックン：日本のみなさんは、社会人になったときのために、学校生活の中で「しゃべる」度合いを高めたほうがいいと思います。社会人になっていきなりプレゼンや営業をしなさい、と言われてもできませんよね。それは、遺伝子レベルの問題ではなく、練習してきていないからです。日本の方は相手の言おうとしていることをくみ取るのはほんとうにうまいんですけど、自分の意思を、相手に気を配りながらきちんと説明して伝えるのは苦手なのかなと……。みなさんもそう思っているのではないでしょうか。

100点じゃなくても、英語は楽しい！

──新学習指導要領では、小学校でも外国語（英語）が教科化されます。アメリカ出身のパックンからアドヴァイスはありますか？

パックン：まずは、英語を英語の授業だけに限ってほしくないです。“Open your textbooks.” “Please erase the black board.” “Everyone take a seat.”など、業務連絡などに、少しでもいいので他の授業でも使ってください。英語の授業でしか使わなかったら、街に出ても使えません。フィリピンでは、タガログ語と一緒に英語も交じって使われていますが、日本では、英語を単語として使っているだけで文章では使わない。使っているのはピコ太郎さんくらいですね。先生が朝の挨拶などに取り入れるとよいのではないでしょうか？ 例えば

「起立」「礼」と言うところを、“Stand up.「起立」”、“Bow.「礼」”、さらに“Sit down.「着席」”、“Quiet, please.「静かに」”というように。これを１週間続ければ、２週目からは日本語なしでも通じると思います。そのひとフレーズだけでも教育のチャンスになります。

２つ目は、勉強よりも練習してほしいです。もちろん勉強は大事だけれど、語学はスポーツと同じでトレーニングすることも重要です。バスケットボールのシュートの打ち方を本で読んでも、実際に練習しなければ絶対にできません。プロの選手だって毎日練習してできるようになるのであって、やっぱり１回や２回できただけではだめなのです。

３つ目は、完璧主義を捨ててほしい、ということです。スポーツの場合、技術が完璧じゃないからといってできないとは誰も思いません。英語も同じように50点でも100点でも、あるいは点数を取れなくても楽しいと思って英語を使ってほしいですね。テストでは細かいところに赤ペンを入れて評価するしかありませんが、基本的に相手に通じれば100点だ、というスタンスでふだんから評価してほしいです。「通じる会話のテスト」と、細かい「文法のテスト」を分けるのもいいでしょう。成績を付けるときに、６：４で「通じる会話のテスト」を重視したっていいと思います。細かいところはミスしてもいいんです。国語で「てにをは」がおかしいことでどれくらい減点しますか？ A評価をBにしますか？

──そのとおりですね。国語のテストではそこまで細かな評価はしていないと思います。

パックン：英語はもっと緩くていいんです。以前、高校３年生の英語のレベルは中学３年生と同じだ、という調査結果を見た記憶があります。高校の３年間の授業はあまり意味がないことになりますね。授業で教えなくても、英語は毎日練習するだけで身に付くと思います。高校の授業は練習時間にすればいいのではないでしょうか。日本人は、テストに向けた英語の勉強しかしないから、いざというときに恥ずかしくて使えないんですよ。日本人同士の会話でいいから毎日45分だけでも３年間使ってみたら、東京オリンピックまでに今の１年生は誰でも通訳ができるようになりますよ。

「がんばる筋」を鍛えよう！

──「ことば」「コミュニケーション」をテーマに、３回にわたってお話を伺ってきましたが、パックンから、先生や子どもたちへ向けてメッセージをお願いします。

パックン：“Do your best!”ベストを尽くすことで、おもしろいように楽になる。今のベストが100%だとしたら、せっかくだからまずは100%出してみよう、と。その100%を何回か繰り返すことによって、振り返ったとき半年前のベストを今は８割の力でできるようになっていることに気付くんです。「すごい、オレ成長してる！」と、自分をほめるのはすごく大事なことだと思います。“Do your best!”の“best”の基準がどんどん上がっていく、目指すゴールが高くなっていく、と思えばいいのではないか、と思います。

僕自身がいつ気付いたか分からないですが、「がんばる」というのは筋肉みたいなもので、がんばっているとがんばることが徐々に楽になる。先生としては、一生懸命教えて最初はいっぱいいっぱいでも、同じ量を伝えることが楽になってくると思うんです。子どもたちも、がんばればがんばるほど、同じ量をこなすことが楽になる。自分の容量が増えて、能力が上がります。がんばるのがつらいと思わないで、がんばるから楽しい、と思

えるようになると、ほんとうに気持ちよく、楽になるんです。がんばる自分が好きになる。勉強する自分が好きになる。僕もいまだに「こんなにたくさんの仕事を今週やらなきゃいけないのか」と思うときもありますけれど、がんばっている自分を第三者の目から見て「かっこいいな」と思えるようになると、がんばるのが楽しくなるし、「がんばる筋」が強くなるんです。それを鍛えるのは先生にも子どもにもできることだと思います。

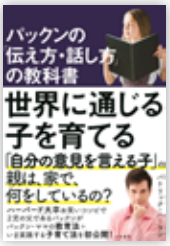
「コミュニケーション」は「愛」をもつこと

──最後にお伺いします。子どもたちはこれからどのように「コミュニケーション」をとっていけばいいでしょうか？

パックン：コミュニケーションの基本として、相手に「興味・関心」と「愛」をもつべきです。「この人、おもしろいな」と。たとえだめなところがあっても、かわいく思うようになれば気長に付き合えるんですよ。僕自身にとっても課題の一つだと思っていて、日ごろから相手のことをかわいいと思えるように心がけているんです。相手が自分を受け入れてくれなくても、「かわいいな、まだ僕のすごいところを理解していないんだね、今度ゆっくり教えてあげよう」と思うようにします。こちらの気持ちが大きければ大きいほど、人と付き合うのが楽になります。自分の子どもにも言っているんですけれど、相手が何を言うのか、どういうことをするのかは、こちらがコントロールすることはできない。だから自分がコントロールできる部分、つまり自分の反応や言動をコントロールすればいいんです。悪口を言われても、怒るか、笑うかという両方の選択肢があるはずです。どっちをとったら自分にとって楽になるのか、自分の得たいものを得られるのか。自分の欲しいものを手に入れるために、自分をコントロールするところからスタートすることが大事です。僕もまだできていません。子どもにも怒るし、マックンにもムッとするときもあります。でも、コントロールできるようにがんばります。みなさんも僕と一緒にがんばりましょう！

Information

パトリック・ハーラン
パックンの「伝え方・話し方」の教科書 世界に通じる子を育てる
大和書房



定価（本体1,400円＋消費税）
2017年
小学生２人のパパであるパックンが、どのような“ことば”と“コミュニケーション”で子育てを実践しているのか。パックン流「話せる子ども」を育てるためのコミュニケーション術を語ります。

○パトリック・ハーラン　Patrick Harlan
お笑い芸人。1970年11月14日生まれ。コロラド州出身。93年ハーバード大学比較宗教学部卒業。同年来日。97年、吉田眞と「パックンマックン」を結成。「英語でしゃべらナイト」「爆笑オンエアバトル」などで注目を集める。現在「外国人記者は見た＋日本 in ザ・ワールド」でMCを務めるなど、多くのテレビ番組に出演。2012年10月より池上彰の推薦で東京工業大学非常勤講師に就任し、コミュニケーションと国際関係に関する講義を行っている。著書に『パックンの「伝え方・話し方」の教科書 世界に通じる子を育てる』（大和書房）、『ツカむ！話術』（KADOKAWA ／角川書店）など。

お客様を迎えて

カンボジアから

６月８日、カンボジアの教育・青年・スポーツ省をはじめとする音楽教育関係者の方々が、教育芸術社に来社しました。今回の来訪は、カンボジアの学校教育に「音楽」「図画工作」を取り入れるにあたって日本で行われた視察研修の一環であり、弊社ではみなさんに音楽の教科書についてご説明しました。

Cambodia

「音楽教育」の導入

６月５日～10日、カンボジア教育・青年・スポーツ省(以下、教育省)、芸術文化省などから、総勢12名の教育関係者が来日しました。訪日の目的は「教育省内の関係各局に芸術教科を担当できる担当行政官を育成する」ためです。

現在、カンボジアでは教科としての「音楽」がありません。音楽は「芸術(音楽、舞踊、絵画)」として、「歴史」「地理」「道徳」とともに「社会科」の中に含まれています。しかし、これからは学校教育に「音楽」「図画工作」を取り入れるべく、新たな教育制度の設置に向けて国が動いています。

そこで今回は日本の教育システムを学ぶとともに、実際に音楽や図画工作の授業がどのように行われているのかなどを視察し、それらをカンボジアの教育システムづくりに生かすための研修が行われました。

研修は６日間にわたり、小・中学校の音楽と図画工作・美術の授業見学をはじめ、クラシック音楽のコンサート鑑賞や資料館・博物館の見学、そして教科書づくりを学ぶため、弊社・教育芸術社との「意見交換会」など、幅広い内容で構成されました。

教科書をつくるために

カンボジアのみなさんが教育芸術社を訪れたのは、６月８日の晴れた午後。来日して４日目ということもあり、和やかな雰囲気で意見交換会が始まりました。「このような機会を頂戴し、私たちを温かくおもてなしいただき誠にありがとうございます。私たちの国の教育分野では、『社会科』の中に『音楽』があります。しかし2019年に『芸術』が教科として独立することから、音楽教育の教科書をつくらなくてはなりません。日本の研修において、御社で教科書の作業について学べるのは非常に重要なことです」と代表のモク・サロン氏(教育省教育総局／副総局長)。

弊社からは、教科書の著者の選定や教材の選択、編集の過程、文科省による承認手続き、学校への供給のプロセスなど、事前に質問を受けていた制作から学校現場での使用に至るまでの概要をお伝えしました。それに対して「印刷にかかる期間はどのくらいか？」「教科書に掲載するイラストや写真はどのようなものがよいのか？」という疑問点の他、「楽譜はパソコン・ソフトで作成するのか？」など、制作に関する具体的な質問が挙がりました。また、カンボジアではこれまで教科としての音楽がなかったため、音楽教師の育成や、現場で何を教えるのかについても課題になります。そのため「日本では音楽教員の数は、教員養成段階で既に足りているのか？」「指導書には、教える方法が書かれているのか？」「学年ごとに教える曲の数は決まっているのか？」「伝統音楽と西洋音楽は教科書の中でそれぞれ何パーセントを占めているのか？」という質問もありました。

アジアの音楽教育でポイントとなる「自国の伝統音楽を教科書でどのように扱うのか」という点にも話題が及びました。西洋音楽における五線譜では記せない伝統音楽を、どのように子どもたちに分かりやすく伝えるのかという点は重要です。弊社では漢字を用いた箏の縦譜と併せて五線譜に音を記した楽譜を掲載したり、楽譜のない古い歌は、音を線や点などの図で表した楽譜を作ったりして、あらゆる形で日本の伝統を損なわないように注意していることを説明しました。カンボジアでも伝統音楽を学ぶには、五線譜のほうが分かりやすいとのことです。

6月8日・教育芸術社 会議室

モク・サロン氏
（教育省教育総局・副総局長）

ユン・キエン氏
（芸術文化省芸術文化総局・副総局長）

ソポン・サムカン氏
（芸術文化省王立芸術大学美術学科・副学科長）

アオ・シーム氏
（教育省カリキュラム編成局・局長）

トン・ボリット氏
（教育省初等教育局・副局長）

リ・キエン氏
（教育省教員養成局・副局長）

今後の展開へ向けて

弊社での滞在は当初予定していたよりも少し長引き、2時間30分ほどになりました。2年後に迫った「音楽」の導入へ向けて、どの方も熱意をもって取り組みを進めている印象を受けました。最後に記念撮影をし、プレゼントとして世界遺産アンコールワットの描かれたカンボジアのプレート、伝統的な手織り布クロマー、お菓子をいただきました。

今年3月に文部科学省から新学習指導要領が公示され、その内容を教科書の中で実現するために、私たちは今後一層力を注いでいきます。このタイミングでさまざまなご質問をいただいたことや、カンボジアでの音楽教育についてお話を伺えたことは、あらためて教科書づくりを見つめ直すよい機会になりました。

ヴァンではこれまでも日本の中華学校や韓国学校の取材を行っており、昨年もベトナム教育訓練省（日本の文部科学省にあたる省庁）からお客様を迎えて教科書について説明した際の様子をレポートとしてお伝えしました。今後もアジアをはじめとする諸外国の伝統や音楽教育に目を向け、多様な情報を発信していきたいと思います。

（ヴァン編集部）

頂いたプレゼント。左からカンボジアのプレート、お菓子、クロマー。

主な質問事項

- どのような人材が著者として選ばれているのか
- 教科書作成の過程とそれにかかる期間
- 学習指導要領と教科書との関係性
- 教科書に掲載する題材と教材の選択方法
- 教科書のサイズ、ページ数、折りたたみページの使用など、教科書の仕様の決定理由
- 文科省による教科書承認の手続きの過程
- 文科省の承認を得る際、間違いや加筆・修正があった場合の対応
- 教科書を公式に印刷する前に、学校現場での試験的な使用はあるのか
- 全国の学校への供給のプロセスはどのようになっているのか
- 再版はどのくらいの間隔で行っているのか
- 学校での使用開始後、実際に学校現場へ足を運んでモニタリングやリサーチを行っているのか

今回の弊社への訪問は、「特定非営利活動法人 JHP・学校をつくる会」が、国際協力機構（JICA）とともに実施中のカンボジア王国「初等科芸術教育支援事業」の一環として実現しました。

Information

2017年に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研　究　大　会

10月 October

27日(金)	**第15回　東海北陸小中学校音楽教育研究大会　石川大会** ときめき ゆらぎ そして きらめく ～感性を働かせ、他者と協働しながら 創造的に表現したり鑑賞したりする力の育成～ 次期学習指導要領の実施を目前にし、音楽科における「主体的・対話的で深い学び」をどのように実践するかが課題の一つです。ご参加の皆様からのご指導やご助言をお待ちしています。	石川県立音楽堂 コンサートホール　他
27日(金)	**第48回　中国・四国音楽教育研究大会　香川大会** つなげよう　音と心と　ときめく瞬間	ハイスタッフホール(観音寺市民会館) 大ホール　他

11月 November

1日(水) 2日(木)	**平成29年度 全日本音楽教育研究会全国大会 沖縄大会(総合大会)** **第58回　九州音楽教育研究大会　沖縄大会** つなげよう未来へ　伝え合おう　音楽・ちむぐくる 多くの先生方のお越しをお待ちしております。第２次案内については、沖音研ホームページよりダウンロードしFAXにて、参加申込下さいますようお願い申し上げます。	沖縄コンベンションセンター 劇場棟　他
10日(金)	**第59回　北海道音楽教育研究大会　オホーツク北見大会** 響きあい 感じあい 伝えあい 共に感動を 本研究大会は、大会主題のもと、オホーツクの音楽教育及び活動の実践を発表いたします。是非多くの皆様のご参加をお待ちしております。詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。	北見芸術文化ホール　他
10日(金)	**第65回　東北音楽教育研究大会　秋田大会** **第57回　秋田県音楽教育研究大会** ひびきあう よろこび ～知覚・感受した音楽の“よさ”を分かち合う授業を通して～ 「一人一人の自力思考」⇔「グループでの対話や試行」⇔「全体による探究や演奏」など、考えたり、伝えあったり、響き合ったりするプロセスを重視することなどを視点とします。皆様のご参加をお待ちしております。	アトリオン音楽ホール　他
10日(金)	**第59回　関東音楽教育研究会　栃木大会** 実感！　音楽の楽しさ　分かち合う思い 研究の視点を「音楽の楽しさを実感する授業の工夫」「創造的・協同的な音楽活動の工夫」「学びの連続性を重視する指導の工夫」としました。皆様のご参加をお待ちしております。	宇都宮市文化会館 大ホール　他
17日(金)	**第59回　近畿音楽教育研究大会　大阪大会** **第62回　小学校大阪府音楽教育研究大会　泉北大会** **第60回　中学校大阪府音楽教育研究大会　泉北大会** なにわの音魂(おとだま) 「知的たくましさ」「豊かな感性」「多様性のなかで人とつながる力」を、音楽科として育むための提案をしていきます。本大会委嘱曲の発表もお楽しみに。	NHK大阪ホール　他

石川大会実行委員会　事務局
金沢市立長坂台小学校　橋本俊彦
〒921-8112　石川県金沢市長坂3-14-1
TEL 076-243-7561 / FAX 076-243-7564
E-mail to-hashimoto@kanazawa-city.ed.jp

事務局
香川大学教育学部附属高松小学校　和中雅子
〒760-0017　香川県高松市番町5丁目1番55号
TEL 087-861-7108 / FAX 087-861-1106
E-mail mako@ed.kagawa-u.ac.jp

平成29年度全日音研全国大会沖縄大会　事務局
宜野湾市立嘉数中学校内　沖音研理事長　松川好伸
〒901-2214　沖縄県宜野湾市字我如古423
TEL・FAX 098-897-6002

第59回北海道音楽教育研究大会オホーツク北見大会　運営委員会事務局
置戸町立置戸中学校　校長　伊藤 勝
〒099-1123　北海道常呂郡置戸町字拓殖47番地の1
TEL 0157-53-2260 / FAX 0157-52-3107

秋田県音楽教育研究会会長
秋田市立桜中学校　校長　髙橋澄雄
〒010-0059　秋田県秋田市桜台1-1-1
TEL 018-837-5305 / FAX 018-837-5306

第59回関東音楽教育研究会栃木大会　大会会長
宇都宮市立晃陽中学校　校長　樽井 久
〒321-2116　栃木県宇都宮市徳次郎町1964
TEL 028-665-0042 / FAX 028-665-6096

第59回近畿音楽教育研究大会大阪大会　事務局
堺市立日置荘小学校内　校長　塩田紀代美
〒599-8114　大阪府堺市東区日置荘西町2-46-1
TEL 072-285-0260 / FAX 072-285-8002

Spring Seminar 2018

新作合唱曲による公開講座

コンクール自由曲向けの新曲発表会「Spring Seminar 2018」を開催いたします。
同声・女声・混声の各２曲（全６曲）を合唱団、司会者、作曲家と学びます。
セミナー終了後「小学校の部」「中学校の部」「高等学校の部」に分かれて、Nコン課題曲のワンポイントレクチャーも行います。

● 日　時：2018年3月27日（火）
会　場：武蔵野音楽大学（江古田キャンパス）
中ホール「ブラームスホール」
〒176-8521
東京都練馬区羽沢1丁目13-1
西武池袋線「江古田駅」北口 徒歩４分
西武有楽町線「新桜台駅」４番出口 徒歩４分
東京メトロ有楽町線/副都心線「小竹向原駅」２番出口 徒歩９分

● 司　会：藤原規生
合唱団：八千代少年少女合唱団
（指揮：長岡利香子）
女声合唱団 ゆめの缶詰
（指揮：相澤直人）
harmonia ensemble
（指揮：福永一博）

● お問い合わせ：
教育芸術社
スプリングセミナー実行委員会
TEL 03-3957-1168
FAX 03-3957-1740
http://www.kyogei.co.jp/

Kyogei Presents

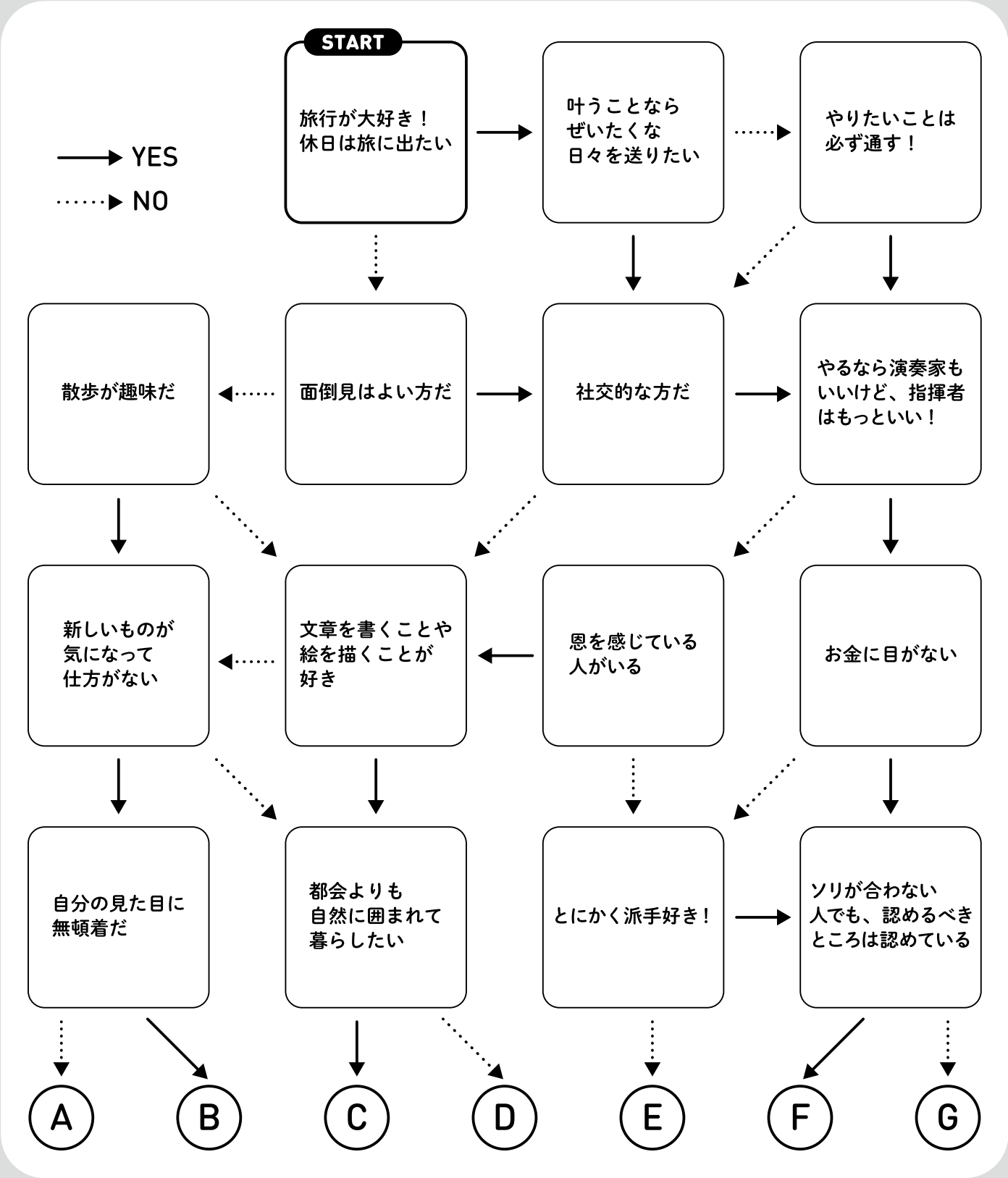
音楽診断

あなたのタイプは？

第❶回 ドイツの作曲家編

教育芸術社オリジナルでお届けする音楽診断企画のスタートです。
第１回のテーマは、ドイツで生まれた作曲家。バロック時代からロマン派まで、７人の作曲家の中から、あなたに似ているタイプの作曲家をご紹介します。

監修・解説＝奥田佳道
Text＝Yoshimichi Okuda



あなたはどの作曲家？

Ⓐ 勤勉家にして芸術家
J.S.バッハ (1685-1750)

クラシック音楽の父。バッハ家は16世紀以後ドイツ中部チューリンゲン地方で活躍した音楽家一族だった。アイゼナハ生まれのヨハン・ゼバスティアン(J.S.)は傑出したオルガニスト、チェンバリスト、ヴァイオリニスト、作曲家としてドイツ各地の宮廷に仕え、器楽曲や宗教曲を創作。1723年以降、ライプツィヒ聖トーマス教会のカントル(合唱長)に就任。多くの教会カンタータ、受難曲を作曲する一方、合奏団コレギウム・ムジクムとも関わった。主要作品に『マタイ受難曲』、『ヨハネ受難曲』、ミサ曲ロ短調、無伴奏ソナタに組曲、『ブランデンブルク協奏曲』、管弦楽組曲など。

Ⓑ 未来を開拓する鬼才
ベートーヴェン (1770-1827)

1790年代の後半からウィーンを拠点に時代も次代も切り拓いた。まずは鍵盤のヴィルトゥオーソとして登場。1800年春、29歳のときに交響曲第1番を発表し、1824年までに9曲の交響曲を書く。圧倒的なスケールを誇る第3番《英雄》、動機の展開を極めた第5番通称《運命》に第6番《田園》、舞踏の神格化とも評された第7番、終楽章に声楽を添えた第9番以外もすばらしい。貴族のサポートも彼の創作を後押しした。若き日から第9番以降も創作を続けた弦楽四重奏曲の他、協奏曲、室内楽、器楽ソナタ、『ミサ・ソレムニス』など、傑作は枚挙にいとまがない。

Ⓒ 繊細な感性のロマンティスト
シューマン (1810-1856)

幻想的な音楽と波乱に満ちた生涯――まさにドイツ・ロマン派の化身ともいうべき作曲家である。名教師フリードリヒ・ヴィークのもとでピアニストを志したが指を痛めて作曲と文筆の世界に傾倒。1830年代は『交響的練習曲』『謝肉祭』『子供の情景』などピアノ曲の創作にほぼ専心。ヴィークの娘クララと結婚後は歌曲集『ミルテの花』『女の愛と生涯』『詩人の恋』などを相次いで作曲。4曲の交響曲、ピアノ協奏曲、チェロ協奏曲、室内楽曲も愛されている。音楽評論家としてメンデルスゾーン、ショパン、ベルリオーズを評価し、若き日のブラームスを見いだした。

Ⓓ 伝統を重んじる こだわり派
ブラームス (1833-1897)

彫りの深い音楽を紡いだウィーンの名士で、伝統と格式を誇るウィーン楽友協会の監督(指揮者)も務めたが、出身はドイツ北部の港町ハンブルク。若い頃、共演したヴァイオリニストを通じ、ジプシーやハンガリーの音楽に興味を抱く。1853年、20歳の年にローベルト&クララ・シューマン夫妻に見いだされ、作曲活動を本格化。優れたピアニストでもあり2曲の協奏曲、多くのソナタ、室内楽曲を自ら初演。1876年、43歳の年に満を持して交響曲第1番を発表。交響曲第2番、第3番はウィーン・フィルによって初演された。世代は離れているがベートーヴェンの「後継者」的存在。

Ⓔ 他芸術にも通じた優雅な才人
メンデルスゾーン (1809-1847)

恵まれた環境に育ったロマン派の才人で、シューマンによって「私たちの時代のモーツァルト」と評された。流麗かつ情熱的な音楽が身上で、1826年、17歳の年に名作「夏の夜の夢」序曲を作曲。その17年後に「結婚行進曲」を含む劇付随音楽を書いた。指揮者としてバッハの『マタイ受難曲』に光を当てたほか、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の楽長に就任。歴史的公演を指揮した。交響曲第3番《スコットランド》、第4番《イタリア》、ヴァイオリン協奏曲、ピアノ三重奏曲第1番、オラトリオ『エリヤ』などが人気。水彩画もうまい。姉のファニーも才能ある音楽家。

Ⓕ 情熱的でアクティブな自信家
ワーグナー (1813-1883)

中世の伝説や北欧の神話をもとに、自ら台本も書いた長篇歌劇を作曲し、ヨーロッパの文学、思想界にも絶大な影響を与えた。その気宇壮大な音楽を愛したバイエルン王ルートヴィヒ2世の経済的支援などにより、バイロイトに祝祭劇場が建ち、1876年にはワーグナー作品による音楽祭も始まった。序夜と三夜(ラインの黄金、ワルキューレ、ジークフリート、神々の黄昏)からなる『ニーベルングの指環』の上演時間は休憩なしで16時間にも及ぶ。他の名作に『タンホイザー』『ローエングリン』『ニュルンベルクのマイスタージンガー』『トリスタンとイゾルデ』。

Ⓖ 自分の世界を極めた職人
R.シュトラウス (1864-1949)

巧緻にして壮麗なオーケストレーション(管弦楽法)を誇るドイツ・ロマン派最後の名匠で、交響詩、歌劇、歌曲に逸品が多い。リストの標題音楽やワーグナーの筆致からも影響を受け、交響詩『ドン・ファン』『死と変容』『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』『ドン・キホーテ』『英雄の生涯』などを作曲。1900年以降は斬新な『サロメ』『エレクトラ』、1911年以降は『ばらの騎士』『ナクソス島のアリアドネ』『影のない女』『アラベラ』を書き、楽劇の世界を極めた。ウィーン国立歌劇場並びに同フィル指揮者としても活躍。最晩年の名作に「4つの最後の歌」など。

奥田佳道(音楽評論家)
1962年東京生まれ。ヴァイオリンを学ぶ。ドイツ文学、西洋音楽史を専攻。ウィーン大学に留学。NHKや日本テレビ、WOWOWの音楽番組に出演。現在NHK-FM「オペラ・ファンタスティカ」パーソナリティのひとり。「ラジオ深夜便〈クラシックの遺伝子〉」などに出演中。著書に「これがヴァイオリンの銘器だ」(音楽之友社)ほか。

ウィーンで活躍したハイドン、モーツァルト、シューベルトなどの人気作曲家は「オーストリアの作曲家編」でご紹介します(掲載号未定)。

イラストレーション：こばやしみさこ